

猫



炎華



目次

さよなら	1
猫の育ったところ	3
檻の中	9
お父さん	14
兄弟姉妹の原理 1 ご主人様の場合 その1	18
兄弟姉妹の原理 2 ご主人様の場合 その2	24
兄弟姉妹の原理 3 お母さんの場合 その1	27
兄弟姉妹の原理 4 お母さんの場合 その2	33
アダルトチルドレン その1	37
アダルトチルドレン その2	42
居場所 その1	48
居場所 その2	55
同類のニオイ その1	63
居場所 その3	68
別れの風景 1 義弟 その1	73
居場所 その4	80
別れの風景 2 ご主人様 その1	87
屈辱	95
今、生きづらいのはお金がなかったから? その1	103
今、生きづらいのはお金がなかったから? その2	106
義務教育 その1 給食は拷問	115
別れの風景 3 ご主人様 その2	120
別れの風景 4 ご主人様 その3	124
別れの風景 5 ご主人様 その4	128
別れの風景 6 ご主人様 その5	133
その後	140
あとがき	141

奥付

さよなら

どうして、こんな風になっちゃったのだろう。

猫は、寂しかっただけなのに。

ただ、寂しかっただけなのに。

愛されたかっただけなのに。

ご主人様に一番愛して欲しかっただけなのに。

どうして、こんな風になっちゃったのだろう・・・

最後の日、

明るい時間に家を出た。

まだ帰ってこないはずなのに、途中でご主人様に会った。

ずっと下を向いていたから、ご主人様に気がつかなかった。

固まった表情で、目をそらしたのはご主人様。

動揺したのは、猫だった。

無言で、そのまますれ違った。

「さよなら！」

背中から声が追いかけてきた。

振り返ると、ご主人様が手を挙げて背中を向けるところだった。

「さよなら・・・」

猫もその背中に言った。

聞こえなかったかもしれない。

聞こえないフリをしたかもしれない。

ご主人様の背中が、少し滲んで見えた。

もう、猫の頭を撫でてくれることもない。

もう、猫を抱いて眠ることもない。

さよなら

これが、ご主人様の見納めになるだろう・・・

猫の育ったところ

猫が生まれたばかりのときにいたところは、

家の密集した町の、狭いアパートの一室だった。

猫のお父さんもお母さんも、小さい頃からそれぞれの家族の為に働いていたので、

お金もなく、まして援助があるはずもなく、

何部屋もあるところに住めるはずもなかった。

壁の薄い部屋だったので、

夜、猫が鳴くと、お母さんは猫をおんぶして、アパートの外に出たそう。

猫が鳴き止むと、部屋へ帰る。

寒い外から、寒い部屋へ。

外よりは暖かいという程度の部屋へ。

お母さんは、悲しかった、と言った。

自分の家があって、もっとのびのびと猫を育てたかったと。

学校も行けずに、自分のお父さんとお母さんと弟妹のために働いて、

お母さん自身も悲しかったけど、

猫に、沢山沢山我慢をさせてしまったのが、もっと悲しかった、と。

仕方がないことだとわかってはいるが、

猫は、もっと自由に生きたかった、と思う。

自由に生きられれば、今、もう少し前向きに生きていけたような気がする。

自由に生きていられる子供達、そうやって育ててもらった大人達を見ると、

すごく羨ましくなる。

猫も、そうだったら、と。

・・・もう、終わったことだ。

猫は不自由なまま、大人になってしまった。

猫に、その時の記憶はない。

覚えているのは、もう少し大きくなったときの事だ。

同じ大きさで同じ高さの建物がいくつもあって、そのうちの一つに住んでいた、という記憶。

灰色の壁の群れ。

明るい緑の芝生。

4人乗りのブランコ。

木でできたベンチ。

いつもお日様が当たって、眩しい位だった。

そこを通り過ぎてすぐの所が、猫の住んでる建物だった。

エレベーターなどなかったので、

暗く狭い階段をぐるぐる一番上まで上って行った。

部屋のドアを開けると、明るい光が眩しかった。

リビングと畳の部屋が一つあり、畳の部屋からベランダに出ることができた。

南向きのそこからは、遠くが見渡せた。

眼下にはずっと畑が続いていて、遠くに電車が走っているのが見えていた。

畑に沿って線路があったので、縁をまわって駅まで向かう。

残念ながら、同じ高さの建物が右斜め前にあったので、

ずっと電車の姿を追うことはできなかった。

あの斜め前の建物からの風景はどんななのだろうと、猫はいつも思っていた。

電車が駅まで走っていくのが、ずっと見えるのだろうか。

緑の畑が広がっているのを、何にも遮られず見渡すことができるのだろうか、と。

結局、それを確かめることはできなかった。

自衛隊の駐屯地が近くにあるので、朝と夜にラップの音が聞こえていた。

猫のお父さんがよく歌っていた。

「おきろやおきろ みんなおきろ おきないとはんちよさんに叱られるー」

「兵隊さんはかわいそうだなー また寝て泣くのかよー」

猫はずっとこのメロディーが使われていると思っていたが、今は違うらしい。

これは、日本軍が使っていたもので、自衛隊のものではないらしい。

もしかしたら、猫が聞いていたのも、本当はこのメロディーではなかったのかもしれない。

お父さんが歌っていたから、そうだと思い込んでいたのかもしれない。

あまり、家にいないお父さんが歌っていたから。

ある日、

猫は思い切って、ベランダから見えていた畑に初めて行ってみることにした。

ずっと、行ってみたかった。

自分の住んでいる建物から南側には行ったことがなかったが、行ってみることにした。

玄関を出て、暗くて狭い階段を、ぐるぐる走って下りる。

「行けるのかな」という不安を打ち消すように、

「大丈夫！ 行けるよ！ 絶対！」と、繰り返しながら。

階段を下りきり、いつもは行かない方向へ進む。

隣の灰色の壁に差し掛かったとき、猫は立ち止まる。

子供の猫が一匹で、自分のテリトリーから出るのはかなり勇気がいる。

猫にとって、そこからがテリトリーの外だった。

平静を装いながら、実はドキドキしながら、一步を踏み出す。

出た！ 外に出た！

もう、大丈夫。

行こう！

壁を完全に通り過ぎると、視界が開けた。

目の前に、青でうまった景色が広がっていた。

ネギだった。

そうか、あの青は、ネギの青だったんだ。

真っ直ぐに伸びた青の間から、白くて丸い葱坊主が沢山顔を出していた。

どんな天気だったかは覚えていない。

曇っていたような気がする。

もうすぐ夕方だったかもしれない。

それなのに、色々なものがキラキラして見えた。

ここは、こんな風になっていたんだ。

上から見るのと、全然違う。

畑の、終わりまで行ってみたい。

行こう あそこまで。

真っ直ぐ歩いて行こう。

脇目もふらずに歩いて行くと、

何か、眼の隅に赤いものが見えた気がして立ち止まった。

ネギの葉っぱの間や、葱坊主の頭には、

赤い羽根に黒い七つの星をつけたテントウムシがとまっていた。

葉っぱを広げると、沢山いる。

見たこともないくらい沢山だった。

・・・綺麗。

ちっちゃい赤い生き物が、白や青の上をちょこちょこ歩いている。

猫よりもずっとずっとちっちゃい生き物。

ネギの葉っぱや葱坊主を広げて、テントウムシを見ながら、歩いていった。

ベランダから見るとすぐそこに見える畑の終わりは、なかなかやってこなかった。

後ろを振り返ると、それでも灰色の群れは、かなり遠くなっていた。

檻の中

お日様が少し傾きかけた午後、

お母さんが言った。

「お母さん、お仕事に行くからね。猫は、その間おばちゃんの所へ行っててくれる？」

緑色のカーペットとお日様が当たって黄色く見えた壁に、窓の影が映っていた。

季節は、もうすぐ春だった。

猫のお父さんのお仕事は、長距離トラックの運転手さんだった。

まだ高速道路もちゃんと整備されていなかったのも、お父さんは何日も帰って来なかった。

お父さんの持ってくるお給料だけでは、猫を育てることができなかったのも、

お母さんは、猫を預けて働くことにしたのだった。

電車に乗って、3つめの駅の所におばちゃんは住んでいた。

猫は、おばちゃんの家で待っていれば、

お母さんが迎えに来てくれるのだろうと思っていた。

おじちゃんもおばちゃんも好きだし、

いとこのお姉ちゃんもお兄ちゃんもいる。

しかし、実際はそうではなかった。

『保育園』という所に行くことになっていたのだ。

なんで？ なんで？

お母さん！

なんで？

こんな所嫌だ！

金網で囲まれて、どこにも行けない。

猫には牢獄のようだった。

お父さんもお母さんもいない。

毎日泣いていた。

「お母さんお母さん」

その頃の友達顔を覚えていない。

友達と遊んだ記憶もない。

友達はいなかったのかもしれない。

保育園で、何を習ったのかとか、

毎日何をしていたのかも全然覚えていない。

ただただすごく嫌だった、という記憶しかない。

「お母さん お母さん こんな所嫌だ」

夕方遅く、お母さんが迎えに来る。

駅までの帰り道、お母さんは訊ねる。

「今日は鳴かなかった？」

黙って見上げると、

「眼が赤いよ。また鳴いたんだね！ なんで鳴くの？ みんな泣いてないよ？」

厳しい口調で言われて、涙目になる。

「また鳴く！ なんで鳴くの！？」

あの檻の中から救ってくれるはずのお母さんに怒られて、

こどもの猫がちゃんと説明できるわけがない。

ようやく、保育園が嫌いだと言えば、

「じゃあ、どうするの？ おうちで一人で待ってるの？ そんなことできるわけないでしょう！」

下を向いたまま、顔も上げられない。

眼からは涙が次から次へとこぼれてくる。

そして、お母さんから、ため息。

どうして、猫は『保育園』にいたくちやいけないの？

どうして、朝から晩までこんな所で我慢しなくちやいけないの？

何も楽しくないよ！

何もできないのに、なんでこんな金網の中にずっといたくちやいけないの？

「お母さん お母さん」

お昼に、お母さんが迎えに来る子もいる。

その子が金網の向こうで、楽しそうに笑っている。

「これから遊びに行くんだ。」

なんで？

なんで？

なんで、猫はここにいなくちゃいけないの？

こんな金網の中、猫のいたい所じゃない！

鳴く

怒られる

怒られるから、また鳴く

鬼のような顔

仕事で疲れたお母さん。

お父さんに不満のあるお母さん。

お母さんに文句を言われて、怒るお父さん。

「猫がいなければ、実家に帰ることができるのに。」

猫がお父さんが好きって言うからから。」

猫はどうすればよかったの？

お父さんもお母さんも大好きなのに、お父さんが嫌いって言えばよかったの？

お父さんもお母さんも、猫の傍にいて欲しいのに。

それとも、猫がいなければよかったの？

いっそ、生まれてこなければよかったの？

そうすれば、お父さんもお母さんも幸せだったの？

だったら、猫はこれからどうすればいいの？

猫がここにいるのは、間違っただことなの？

蛍光灯の青い光が、ぼんやり滲んで見えた。

お父さん

お父さんのお父さん、つまり猫のお祖父ちゃんは、お父さんが子供の頃亡くなった。

出掛けた先で空襲に遭い、避難した防空壕が崩れてお祖父ちゃんは還らぬ人となった。

終戦の一週間前のことだった。

「終戦が一週間早かったら、親父は死ななかつたのに。」

お父さんは猫にそう言った。

もしそうだったら、

猫も「お祖父ちゃんお祖父ちゃん」と甘えていられたのだろうか。

猫が大人になってから、不思議に思ったことがある。

お祖父ちゃんはなぜ兵隊さんにならずに済んだのだろうか？

お母さんのお父さんは、戦争に行って帰ってきたのだと聞いている。

なぜだろう？

体が弱かったわけではないと思う。

職人さんだったと聞いているので、その関係か。

それとも、軍隊の何かに従事していたのか。

考えてみても、お父さんにわからないことが、猫にわかるわけがない。

頼りにしていたお祖父ちゃんが亡くなり、家族には苦労が残された。

戦争が終わったあと、都市部には食料はない。

家は焼け、田舎に頼れる親戚もない家族は、食うに困ったという。

お父さんは、6人兄妹の4番目だった。

姉2人兄1人妹1人弟1人。

お父さんのお姉さん2人は、お母さんが違うお姉さんだと知ったのは、ずっと後の事だった。

そして、お父さんにお姉さんがいること自体、猫は知らなかった。

ある日、納豆が手に入ったという。

兄妹が見ている中、風邪をひいていたお父さんのお母さん、つまり猫のお祖母ちゃんが納豆を混ぜる。

「あああーっ！」

兄妹の悲鳴があがる。

混ぜている納豆の中に、お祖母ちゃんの鼻水がぼとっと入ったのだった。

「それで、どうしたの？」

と訊くと、

「食べたよ。それしか食べるものがなかったから。」

その頃、お父さんの家族は、借家に住んでいたわけではなかった。

しかし、お隣の家が、お父さんの家の土地まで売ってどこかへ行ってしまったので、

家が無くなり、家族はとても苦労したそうだ。

土地を買った人の好意で、ずっとそこに住んではいられたのだが。

戦後はそういうことが多々あったそうだ。

お父さんは、お兄さんと同じに、中学を出たらすぐに働きに出た。

「勉強は好きじゃなかったから、学校に行きたいとは思わなかった。

兄貴は、高校にやりたかったみたいだったけど。」

あっけらかんとお父さんは言った。

「お父さんは甘やかされて育ったんだよ。

体が弱かったから、お祖父ちゃんもお祖母ちゃんも、お父さんをすごく大事にして。」

お母さんは続ける。

「一人だけ空襲がひどくなったとき、学童疎開させてもらって。

そこで病気になったとき、お祖父ちゃんもお祖母ちゃんも、

家中の食べ物かき集めてお父さんの所に行ったんだよ。」

「お母さんがお父さんの立場だったら、絶対高校に行った。」

と、お母さんは言う。

「勉強したかったのに、家に帰るとすぐに妹や弟を背中にくくりつけられて。」

お父さんとお母さんの立場が逆だったら、よかったのかな。

猫はお母さんの顔を見ながら思う。

住む所も食べ物もないけど、親やお兄さんに可愛がられて育つのと、

住む所があって、食べ物も豊富にあって、お腹が空くことはないけど、

自由がなく育つのと、どちらが幸せなのだろう？

兄姉弟妹の原理 1 ご主人様の場合 その 1

お母さんの子供の頃、お母さんの家はとても貧乏だった。

今でこそ、広い畑、山もある。

それは全てお母さんと 2 人の妹、つまり娘 3 人が働いて買ったものだそうだ。

戦後すぐの田舎の土地なので、そんなに高価ではなかったが、3 人はとても苦勞したそうだ。

「お母さん、勉強したかったよ。

でも、働けて、女が学をつけても何の役にも立たないって言われて、

中学を出て、すぐ働きに行ったんだよ。」

今でも、そう言う。

「学校から帰ると、すぐに弟や妹を背中にくくりつけられて、

『勉強なんかしないでいいから！』って、怒られて。

お母さん、悲しかったよ。」

お母さんは、兄 1 人、妹 2 人、弟 5 人の 9 人兄妹の 2 番目だった。

お兄さんとすぐ下の妹は体が弱かったので、

お母さんのお母さん、つまり猫のお祖母ちゃんにとっても大事にされたそうだ。

特にすぐ下の妹は、自分に似ているからと、猫かわいがりだったそうだ。

反対にお母さんは、お祖母ちゃんに疎まれていたと言う。

それでも、お母さんはお祖母ちゃんを大切にして、とても気を遣っていた。

叔父さんが、お祖母ちゃんの大好きな家を建て直すと言ったときも、

お祖母ちゃんの気持ちを考えたの？

勝手に決めないように、と諭し、

お祖母ちゃんが寝たきりになると、すぐに飛んで行って介護を手伝っていたりした。

晩年はお祖母ちゃんも、「ねえちゃん、ねえちゃん」と頼っていたようだった。

猫は思う。

なぜ、親に対し、愛されない者が一生懸命になるのだろうか、と。

猫のご主人様もそうだった。

お義母さんが溺愛していたのは義弟の方で、

兄であるご主人様は、あまり愛されていないように猫からは見えた。

ご主人様のお父さんは、ギャンブルが好きだった。

仕事の帰りには必ずパチンコ。

休みの日は競馬だった。

生活費はお義母さんが働いて工面していた。

ご主人様は自分で働いて、夜間の大学に通った。

お義父さんはお金がなくなると、お義母さんに無心し、

それも使ってしまうと、家中の金目の物を売りさばっていた。

それでも足りなくなって、とうとうサラ金にまで手を出した。

皆が気がついたときは、借金は膨れあがり、

本人も、お義母さんも、どうしようもなくなっていた。

ご主人様が、一度だけ、と、その一部を返した。

だが、心を入れ替えるどころか、それに味を占め、

ご主人様のボーナスの時期になると、

「金を貸してくれ。」

と、無心の電話が入る。

お義父さんには強くでることができても、お義母さんに泣きつかれると、

ご主人様は、お金を貸してしまう。

正確には、『貸す』のではなく、『あげる』のだ。

お義母さんは、義弟にはいっさいそういう願いはしない。

義弟は、いつも「金は無い。」と言っていたが、

実際は、何百万もする車を買、高いスーツを買、

クリスマスに彼女と過ごすための一流ホテルの部屋を予約したりしていた。

それを知っていたにも関わらず、お義母さんは、いっさい義弟にお金をださせようとはしない。

「お兄ちゃん、お願いします。お兄ちゃんだけが頼りなの。」

そんなときばかり頼りにされたって、ちっとも嬉しくないよ、

と猫は思ったが、

ご主人様は、その言葉がすごく嬉しかったらしい。

言われるままにお金を渡していたようだ。

その頃、ご主人様の勤めていた会社が倒産した。

何ヶ月もの未払いの給料。

入社したての頃に、ご主人様の名義で借りさせられていた会社のためのお金。

何度もご主人様に早く返してもらった方がいいと言っていたのだが、

とうとう心配した通り、ご主人様が返さなくてはいけなくなった。

生活はだんだん苦しくなっていった。

猫も働いて、生活費を工面した。

そのうち、お義父さんの借金が、本当に誰もが払えないくらいの額になり、

ご主人様の両親は離婚にいたる。

まだ独身の義弟が、お義母さんを連れて家を出た。

義弟ばかりに苦勞はかけまいと、ご主人様は2人の生活費を援助する。

本当は猫たちの生活も、苦しかったのだが、

ご主人様は、それでも額を減らすことなく援助する。

猫は、みんなが頑張っ生きていくなら、それはそれでいいのだと、思っていた。

いや、今になると、思おうとしていたのかもしれない。

ある時、お義母さんが、

「これ、持って行って。」

と、沢山の洗剤をくれた。

「新聞屋さんがくれたんだけど、私ね、こんなの使わないの。」

いつも、A を使ってるから。」

それは当時流行っていた高級洗剤だった。

納得できない思いをかかえつつ、黙って話を聞いていると、

「働いてると作るのがめんどくさくなって、食べて来ちゃったりね。

B も、家で食べないしね。」

猫は腹が立った。

何も言わないで済ませたのが奇跡のようだった。

今までずっと我慢してきた。

みんなが頑張っているならと、猫も頑張ろうと思っていた。

本当のところはどうなのか、ご主人様に訊くと、

義弟はほとんど家にお金をいれず、相変わず贅沢をしているらしい。

そして、援助のお金は全て義弟の車の駐車場代になっているらしい、と言う。

それを知っていて、言われるがままにお金を渡していたのか・・・

高級な洗剤を使い、外食をして、都心の高い駐車場を借りて、

別に必要もない車を持って、十万円以上もするスーツを着て、

何万円もする Y シャツを着て、うちより贅沢な暮らしをしていけるなら、

援助の必要なんてないじゃないか。

今は、うちが援助して欲しいくらいなんだ。

頑張って我慢して、切り詰めたお金は

ほとんど潰れた会社のための借金と援助のお金に消えていく。

言いなりのご主人様に任せておいたら、猫たちが潰れてしまう。

猫は、ご主人様を守ると決めたんだ。

猫が悪者になっても、憎まれても、ご主人様を守らないといけないんだ。

「援助のことは猫に任せてくれないかな？」

穏やかに言った。

どんなに腹が立ったとしても、ご主人様に罪はないのだから。

あるとしたら、唯一つ、言いなりになってもお義母さんに愛されたいと願うことだ。

それを訊いた途端、ご主人様はこう言い放った。

「俺は！ お前と別れても家族をとる！」

兄姉弟妹の原理 2 ご主人様の場合 その 2

「こんな風にいいように利用されるなら、家族を捨てたい！

俺は、自由になりたい！」

お義父さんが、再びサラ金に手を出したことがわかったとき、

絞り出すように言ったご主人様の言葉だった。

本気でそう思うなら、猫がご主人様を守ろう。

悪者になっても、憎まれても、嫌われても、ご主人様の盾になろうと決めた。

ご主人様が猫を愛してくれているなら、それでいいと思った。

ご主人様以外の人間に嫌われようが、憎まれようが平気だった。

家族に利用されないよう、少しずつでも遠くへ。

手の届かない所へ。

それが猫の使命だ。

あの言葉は、嘘だったのか・・・

いや・・・

あのときはそう思っても、また、

「頼りになるわね。さすがお兄ちゃん。」

などと言われ、忘れてしまったのだろう。

「お前と別れても家族をとる！」

猫の中で、何かが折れた音がした。

急速に心が冷えていく。

冷えていく心の中で、一つ理解したことがあった。

そうか、『家族』って・・・

『家族』って、ご主人様にとって、お義母さんと義弟のことだったんだ。

猫は、ご主人様にとって、家族でさえなかったんだ・・・

なのに、何を頑張ろうとしていたんだらう。

暗い部屋の窓際で、長い間ぼんやりしていた。

窓を開けると、いつの間にか雪が降っていた。

寒い・・・

愛されたいから、望まれたことは何でもする。

否と言ったら、嫌われるから、口が裂けても言えない。

無理をしてでも、希望を叶えようとする。

「頼りになるわね。」

と、笑ってくれると、愛された気になる。

頼りにされているんだと、安心する。

俺がいないとだめなんだと、思い込む。

それを妨げようとする猫は、ご主人様にとって余分なもの、だった。

不安を煽る存在でしかなかった。

それに、何故気がつかなかったのか。

頼りにされる＝愛される

では、決してない。

ご主人様も心の中ではわかっているはず。

利用されていると、言っていたのだから。

それでも、それだけでもないと不安だということだろう。

いつかは、自分も愛される。

そんな希望を捨てられない。

そんな日は、こないよ・・・

義弟がいなくなれば、あるいは・・・

でも、いなくなったとしても、そんな日はこないだろう。

ご主人様にとって、『猫が絶対必要』ではなかった。

お義母さんの代わりでしかなかった。

愛されない心の穴を、猫に愛されることで埋めていただけ。

それに気がついたときが、

猫が『ご主人様』という唯一の心の拠り所を失った瞬間だった。

兄姉弟妹の原理3 お母さんの場合 その1

お母さんは9人兄妹の2番目で、長女だ。

よく考えてみると、実際にお祖母ちゃんがお母さんに冷たかった、

という印象は猫には感じられなかった。

お母さんの、自己申告のみである。

ただ、猫が経験したことで、

「ああ、そうだったのか。」

と、思い当たることは多々ある。

例えば・・・

その前に、

猫は、お母さんの実家からすると、初孫である。

3つ年下の従妹がいて、彼女はお祖母ちゃんに可愛がられていたというお母さんの妹の娘だ。

お父さんとお母さんは仕事で忙しかったので、

猫は夏休みに、一人でお母さんの実家（田舎と呼んでいた）に泊まるが多かった。

一番最初に、なにかおかしいと思ったのは、

小学校4年生の時だった。

それまでは、あまり意識したことがなかった。

それは、自分が一番年上だからそうなんだろう、と漠然と思っていたように思う。

夏休み、田舎に行く前の日の夜、

猫が「明日行きます」という電話を入れたのだが、

先に行っていた従妹が電話にでたので、

「明日行きますと、お祖母ちゃんに伝えて。」

と言い、少し話をして切った。

お母さんに告げると、なぜ、お祖母ちゃんに直接

「明日行きますので、よろしくお願いします。」

と言わなかったのかと、ひどく怒られた。

「お祖母ちゃんはね、すごく厳しいんだからね！」

猫はとてもびっくりした。

そんなことを聞いたことは、今までに一度もなかった。

従妹もそんな挨拶をしているのだろうか？

従妹に、

「よろしくお願いします、なんて電話する？」

と訊くと、

「なに？ それ？ しないよ。」

なんで猫だけ「よろしくお願いします。」と言わないと怒られるわけ？

それからだった。

お祖母ちゃんに、警戒心を持ったのは。

次に、気がついたのは、

お祖母ちゃんが、菓子パンを沢山買ってきて、

「どれでも好きなものを取りなさい。」

と、言ったので、いつもはジャムパンなのだが、

今日こそはこれを、と手に取ったのは、従妹が好きなパンだった。

途端に、お祖母ちゃんが、

「それはだめっ！ それはCちゃん（従妹）のために買ってきたんだから！

ほら、猫ちゃんの好きなジャムパンもあるよ。」

猫は特にジャムパンが好きだったわけではない。

お祖母ちゃんがいつもパンを買ってきてくれるお店は、

田舎の小さな雑貨屋のようなお店だったので、

種類は少なく、カレーパンとか、クリームパンなどはなく、

あんぱんのような定番のパンしかなかった。

その頃、猫はあんこが苦手だった。

それで、なんとか食べられそうなジャムパンを食べていただけだった。

そして、従妹の好きな美味しそうなそのパンはいつも一つしかなかった。

「今日はこれがいい。お祖母ちゃん、どれでもいいって言ったじゃない。」

あまりにもお祖母ちゃんが、頑固にそれはだめだと言うので、

ムキになって、猫も譲ろうとはしなかった。

いつも、譲っていた。

美味しそうなパン。

猫だって食べてみたい。

その他にも、色々なことを従妹達に譲ってきた。

ただ、一番年上だから、というだけで。

それが当然という大人の理屈が納得できなかった。

口では、「偉いねえ」などと言いながら、

心では、それが当たり前だ、と思っている。

聞き分けのない年下の子を、

納得させて我慢させることができないから、

それが面倒くさいから、

「お姉ちゃんでしょ。」

の一言で、上の子に我慢させる。

ただ、お祖母ちゃんが猫にそれをあきらめさせる理由は他にあったのだ。

それはもっとずっと後になってから理解したことだが。

そのときは、何故そんなにお祖母ちゃんがムキになるのかわからなかった。

たまには、譲ってもらったっていいじゃないか。

パン、一つくらい。

「これがいい！」

お祖母ちゃんの、怒りを無理に押さえた引きつった顔。

それを横目に、いつも食べる縁側に行って座った。

なんでいつも我慢しなくちゃいけないのか。

家でも、ここでも！

ずっと食べたかったパンは、やはり美味しかった。

パンを食べながら、嬉しいと言うより、悔しかった。

とても悔しかった。

後で、お祖母ちゃんがお母さんに言ったことは、

「Cちゃんの好きなパンを無理矢理盗って、隠れて食べた。」

お母さんは、猫の言い分も聞かず、

猫の気持ちも考えず、

お祖母ちゃんの言葉だけを信じて、ただ怒るだけだった。

そして、極めつけが、

猫が初潮を迎えて何ヶ月か後に田舎へ行ったとき、着いた途端に生理が始まった。

いつもはそんなことはないのだが、

旅の疲れがでたのだろう、ひどくお腹が痛くなり、気持ち悪くなった。

隣の部屋に布団を敷いてもらって、横になっていた。

うとうとしていたのだろうか、襖をあける音で目が覚めた。

少し開けて、すぐに閉めた感じだった。

後で聞いたことによると、お祖母ちゃんだった。

そして、言ったことが、

「お嬢様は寝てござる。」

生理で辛いということは、お母さんにしか言ってなかった。

猫はその頃は滅多に寝込むことはなかった。

来て早々に寝込んでいるのをみれば、普通なら、

「猫ちゃんは、大丈夫なの?」

と、心配するだろう。

それが、心配するでもなく、あの言葉。

ちなみに、

従妹は、喘息の持病があった。

そして、具合が悪く、寝ていることもあった。

なのに、たった1時間か2時間横になっただけで、そんなことを言われるとは。

さすがに、猫も嫌になった。

毎年、夏と冬と春と楽しみにしていた田舎へ、

猫はその年の冬から行かなくなった。

嫌われて、疎まれているのに、わざわざ行く必要はない。

悲しくて、嫌な思いをするのなら、それに近づかなければいい。

猫はそう決めた。

それから、本当に必要な用がない限り、田舎へ行くことはなかった。

兄弟姉妹の原理4 お母さんの場合 その2

大人になって、ご主人様の母親に対する想い、というものを知り、理解したことがある。

お母さんも、ご主人様と同じなんだ。

愛されない方が、親に対して一生懸命になる。

盲従というのだろうか。

『その1』で、しつこく『従妹は』と、

猫との扱いの違いを書いた理由をわかっていただけるだろうか。

子供の頃は親の羽根の下から逃れられない。

親が全てと言っても過言ではない。

だが、何故大人になって、親元以外に居場所ができているのにも関わらず、

そんなに一生懸命になるのだ？

どんなに親に尽くしたところで、親の愛はずっと弟、妹の方にいつている。

愛されている弟、妹は、親に対して、何も尽力しない。

すり寄る体を、押し返すことを平気でする。

それでも許される。

それでも愛される。

愛されない者にとって、羨ましい光景だろう。

そして、頼られることによって、自分も同じ愛を受けたいと？

『母』と『祖母』とは違うが、

猫は、比較され、差別され、否定されるのが嫌で、そんな場所から離れた。

あんなに可愛がられて、お世話になったのに、と言われても、

あんな思いをするのは二度とごめんだ。

確かに、従妹が来るまでは可愛がられたかもしれない。

毎年、お世話になった。

そして、とても楽しかったときもある。

それは感謝する。

でも、それがあったとしても、あの『嫌な』場面を思い出すと、全て帳消しになる。

楽しい記憶は、塗り替えられてしまった。

何故、あんな思いを常にしながら、親に尽くすのか。

その気持ちと理由は理解しているつもりだ。

洗脳だろう。

子供の頃に受けた洗脳は、たぶん、一生続くだろう。

お祖母ちゃんが、猫より従妹を可愛がったのは、

たぶんに、従妹が自分の可愛がっている娘の子供、ということがあったろう。

猫の性格は、お母さんに言わせると、

『D 叔母ちゃん（すぐ下の妹）そっくり。』

だそうだ。

どこがどうそっくりなのか、猫にはわからないのだが。

そして、お母さんは、

猫のためにお祖母ちゃんに何か言ってくれたのだろうか？

具合の悪い猫を心配することもない、

ここまで勝手に来て、寝込むなんてありえない、

甘やかされて育てているから、この始末、というような台詞に、

腹を立ててくれたのだろうか？

否。

お祖母ちゃんの言うことを頭から信じて、猫を頭ごなしに怒るくらいだから、

何一つ言うこともせず、考えてもくれなかったのだろう。

猫にも何か理由があったのだ、とか、

言い分があるのだろう、とか、

一切思いつかず、

お母さん（お祖母ちゃん）に、自分の子供が不良品だと言われたことを怒りもせず、

お祖母ちゃんに、怒られてしまったことだけを恥じて、

猫のことなど、考えもしなかったのだろう。

また、D ちゃんと比較される。

また、D ちゃんの娘の C ちゃんはいいい子なのに、猫ちゃんは・・・と言われる。

「D ちゃんの教育がいいから、C ちゃんはいいい子なのね。」

猫のことより、お祖母ちゃんに悪く思われたくない。

それがお母さんの気持ちだっただろう。

猫は、良かったと思う。

呪縛に囚われることなく逃れられた。

一生、そんな呪縛に囚われて生きていくのはいやだ。

どんなに尽くしても、愛されないなんて、

どんなに尽くしても、当然と思われ、いいように利用されるなんて、辛すぎる。

そして、猫は逃げた。

そんな『想い』の犠牲にはなりたくはない。

想いを残し、傷だらけになったが、

その傷は何年も治らなかったが、逃げ切れた。

そして、満身創痍の猫を、暖かい腕の中で眠らせてくれる

最高の居場所を造ってくれるひとに会った。

そのひとに会えたから、逃げ切ることができた。

そのことに、ただただ感謝したい。

アダルトチルドレン その1

猫は、全てにおいて、楽しいことはあまり覚えていない。

辛かったことや、悲しかったこと、

嫌だったことや、腹が立ってしょうがなかったことは、鮮明に覚えている。

経験は、何度も思い出すことによって、強固に記憶されるのだそうだ。

普通は、楽しいことは何度も思い出して記憶され、

嫌なことはあまり思い出さずに忘れてしまうそうだ。

残念ながら、猫の脳はそれを許してはくれない。

楽しかったことは、すぐに消え、

辛かったことは何度も繰り返し思い出され、

ほんの3歳くらいの頃の記憶でさえ鮮明だ。

子供の頃の猫。

誰にも『猫』という存在を認めてもらえなかった。

否定され、必要とされず、後に出会うご主人様にさえ。

さすがに、いてもいなくても同じというほどではなかったが、

『ありのままの猫として存在すること』

を認めてはもらえなかった。

お父さんもお母さんも、とても忙しかった。

お父さんは、喘息の持病がある上に、嫌なことはすぐ投げ出す人だった。

お母さんは、発作が起こったお父さんを看病し、

仕事を辞めないように、目を光らせ、

自分も一生懸命働いて、毎日くたくたになっていた。

くたくたになって、いらいらして、その上、猫に面倒をかけられなくなかった。

お父さんは、猫の面倒をみられるほど、大人ではなかった。

自分の面倒を見て欲しいくらいだったろう。

お母さんは猫に、とても厳しかった。

大人になって、一人でも生きていけるように、と。

だから、厳しくするのだ、と。

いつも叱られていた。

思い出すのは、お母さんの怒った顔ばかり。

テストの点が悪いと怒られ、

授業参観で、

なぜ一人だけ手をあげないのかと怒られ、

よそ見していたと怒られ、

落ち着きがないと怒られ、

ちょっと何か意に沿わないことがあれば怒られた。

小説や漫画、アニメに、

なぜ授業参観、運動会、文化祭、その他の学校行事に、

親が来てくれないと気を落とす場面があるのか、猫には理解ができない。

猫は、親にそんな弱みは掴まれたくない。

怒るためのいい材料を、そんなことで与えたくはなかった。

親が来られないと聞くと、心からほっとした。

猫はいつも孤独だった。

味方をしてくれる人は誰もいなかった。

大好きだった田舎でも、

誰も猫を、猫として受け止めてくれる人がいないと知って、

更に孤独だった。

友達、とよべる人もいたが、親にも受け止めてもらえない想いを、

他人、それも子供が受け止められるはずもない。

猫は、寂しかった。

そして、勉強をすることしか、許されていなかった。

お母さんがしたくてたまらなかった『勉強をすること』だけが許されていた。

猫は、しないと怒られるから勉強をしていた。

心から知りたいと思って勉強をするようになったのは、

ずっとずっと後になってからだ。

他は、何もなかった。

何一つ、なかった。

何度も消えてしまいたい、と、思った。

生まれてきた意味も、なぜ存在しているのかも、わからなかった。

死なないから、生きている。

それが生きている意味だった。

否定され、必要とされず。

自分の意思を通そうとすれば、必ず否定され、嫌われる。

すんなり通ることは万が一にも、ない。

ありのままの猫でいいと言ってくれる人は誰もいなかった。

他の誰が許してくれなくても、

唯一許してくれるはずの親にさえ、

猫は、猫として、存在することを許してはもらえなかった。

やがて、あきらめた。

なぜ許されないのか、考えることもやめた。

いつかは、と、期待することもやめた。

自分がやれば叶うことには期待してもいい。

だが、何かが、そして、誰かが関わって初めて成立することは、

期待しない方がいい。

期待しても、裏切られることばかり。

だったら、期待しない方がいい。

どうせ、悪いことしか起こらない。

だったら、最悪のことが起こることを覚悟していればいい。

そうすれば、傷つかなくて、済む。

ああ、やっぱり、と思えば済む。

猫は、そうやって大人になった。

アダルトチルドレン その2

『アダルトチルドレン』という言葉聞いたことがおありだろうか。

直訳すると、大人子供。

体ばかり大人になって、中身は子供のまま大人になりきれない大人。

と、猫は認識していた。

それは間違った認識らしい。

本当はどんな人のことを言うかというと、

『家庭としての正常な機能を果たしていない機能不全家庭で成長したために、

大人になってからも心に傷を持っている人』

だそうだ。

猫は思う。

『正常な機能を果たしている家庭』って、なんだ？

親が、しっかり親としての責務を果たし、

付帯義務を負わせる条件付きの愛情をなくして、子供に無条件に愛情を注ぎ、

家庭内でコミュニケーションがしっかりとれているため、

親子間の相互理解が進んでおり、

子供は例え叱られても、命令されても、親にそうされる理由をちゃんと納得しており、

もちろん、精神的、肉体的な虐待はなく・・・

・・・そんな家庭なんて、この世にあるのか？

親は、食べるために働く。

猫の両親のように、お父さんの稼ぎが少なければ、お母さんも働く。

それでも、ぎりぎりの生活。

外に出れば、嫌なことも沢山ある。

子供になんて、かまっていられない。

一人で何でもできて、手のかからないいい子ならば大助かり。

心にも時間にも余裕がないから、面倒を起こして欲しくない。

だから、意に沿わないと、怒って従わせようとする。

そもそも『あなた』という子供を育てるために働いているのよ。

『あなた』を食べさせて、教育を受けさせて、

立派な大人にするために働いているのだから、

私達に従うのが当たり前。

そして、今、あなたが大人になっても困らないように怒ってるの！

わかってるの？

あなたのためなのよ？

なぜ、言うことをきかないの？

そうじゃないと言ったでしょう！

どうして、いつもいい子でいてくれないのよ！

どうして、私達に恥をかかせるの？

そんなんじゃ、立派な大人になれないんだからね。

あなたのために言ってるの！

あなたのためなのよ！

・・・なにが「あなたのために」だ！

『自分達のために』だろうっ！

猫の中には、傷ついたままの子供の猫がいる。

つらいこと、悲しいこと、嫌だったこと、苦しかったこと

負の思いばかりが心の引き出しにしまわれ、

楽しかった思い、嬉しかった思いはゴミ箱にどんどん捨てられてしまうため、

益々、傷は深く、多くなっていく。

その存在は、ずいぶん前から知っていた。

でも・・・

いつまでも、いつまでも、子供の猫の傷を癒やせないでいる。

子供の猫は叫ぶ。

「消して！ 子猫を傷つけた全てのモノを消して！」

それは。

それは、子猫を傷つけた全ての人間を殺せ、と？

「そうだよ！ できるでしょう？」

大きくなって、自由になったんだから！」

そんなことできないよ。

そんなことしたら、余計子猫が傷つくよ。

猫だって、ただじゃ済まないんだよ。

「そんな事言って。

できないくせに。

子猫を癒やしてくれるなんて言って。

何もできないくせに！

嘘つき！

なんで子猫がこんな傷だらけで、

ずっとずっと痛い思いしてなくちゃいけないと思うの？

あいつらが！

あいつらがやったんだよ！

あいつらのせいなんだよ！

なんで、目をそむけてるの！

猫だって、ほんの少しだって許してないくせに！！」

それは・・・

「許してないのに、みんな許したような顔をして。

それで自分を誤魔化しているだけなんだ。

本当は消してしまいたいくせに。

みんな死ねばいいと思ってるくせに。

みんな殺してしまいたいと思ってるくせに！」

違う！

確かに、許してはいない。

みんな死ねばいいと思ってる。

いや、もっとひどいことを思ってる。

死ぬほど苦しめばいいと思ってる。

死んで楽になるなんて許さない。

苦しんでいるところを見て笑ってやりたいと思ってる。

そうじゃないと気が済まない。

そう、できさえすれば・・・

「そうだよ。

その通りだよ。」

でも、そうしたら、その人を頼りにしてる人達も苦しむよ。

「そんなの！

同罪だよ！」

違うよ。

周りの人に、恨みはない。

「何言ってるの？

じゃあ、なんで子猫が傷つけられているとき、その人達は止めてくれなかったの？

子猫を傷つけるような性格に育てた人達だよ？

子猫を傷つけるような性格の人に育てられた人達だよ？

そんな人を好きだって言える人達だよ？

みんな、みんな同罪じゃないか！」

「なんで黙ってるの？

猫だって、わかってるんでしょう？

そう思ってるんだ。」

ごめん・・・

「謝ったって、猫が謝ったって、傷が癒えるわけじゃない！

あいつらを消してよ！

それができないんだったら、子猫を消してよ！

痛い！ 痛いよお！ 助けて！ 助けてよ！」

ごめん・・・

「痛いよ・・・苦しいよ・・・」

ごめん・・・

子供の猫は、今も傷ついたまま鳴いている。

猫が、せめて、大きな声で、嫌だと、やめたと、言えたら・・・

居場所 その1

猫が働いていたのは、70歳過ぎの女性オーナーが経営する小さなお店だった。

その他に、オーナーの身内の女性が手伝いに来ていた。

オーナーはとてもきつい人だった。

ご主人を早くに亡くし、女手一つで子供達を育て、

お店を切り盛りしてきたのだから、そうでなければ生きていけなかつたらう。

それを成し遂げた自信からか、

元々そういう性格だったのかはわからないが、

『自分は絶対に間違わない』

と、信じて疑わないようだった。

絶対に間違わない人間なんていやしない。

では、間違えたら、人はどうするのか。

「ごめんなさい。」

と、認めて謝るか、

「私知らない。」

と、自分は関わってないフリをするか、

「あんたがやったんでしょ！」

と、他人のせいにするか。

自分は間違わないと信じて疑わないオーナーは、

「あんた！ 何やってるのよ！」

間違ったことは全部猫のせいにした。

自分がやったことをすっかり忘れてしまい、

真実猫が間違えたのだと思い込んでいるようだった。

反論しても、事実を忘れてしまっているのだから、どうしようもない。

自分のせいではないことで怒鳴られる。

だが、そこを辞めてしまうと、

次の職場がいつみつかるかわからないという不安から、

我慢せざるを得なかった。

猫が辞めたら、生活費が工面できなくなる。

ご主人様のお給料も入ってきてない今、猫が働かないと。

毎日、つらかった。

理不尽なことで苦しかった。

家に帰っても、お金の心配で心が安まらず。

猫のお給料も支払いと生活費に全て消えていく。

せめて、話を聞いて欲しいと、

「今日ね」

と、話しても、ご主人様はテレビに夢中になって、

猫の話を少しも聞いてはいない。

途中で話を止めても気がつかない。

聞いてくれるときもあったが、最後は必ず、

「だから？」

「ふう～ん ひどいね。」

「かわいそかわいそ いい子いい子 どうでもいい子。」

まるで他人事だった。

話しても、救われるどころか、虚しくなるだけだった。

家のことは、猫が仕事から帰ってきてからと、休みの日に全部やっていた。

ご主人様は一切手を出さない。

そして、仕事を家に持ち帰ってくるため、

休みの日は猫もご主人様の仕事を手伝っていた。

細かい図面の仕事だったので、気も遣うし、目も痛くなる。

慣れないソフトを使うので、何度もやり直させられる。

設定が間違っていて、ちょっとでも線が太くなると、

建造物にかなりの誤差を生じるので、間違えるわけにはいかないのだ。

その日は、

体も心もくたくたになって、晩ご飯を作る元気も気力もなかった。

今朝、ご主人様のお弁当に全部入れてしまったので、

家には、すぐに食べられる物が何も無かったのだが。

ご主人様が帰ってきて、晩ご飯がないと聞くなり不機嫌になる。

「なんで俺よりずっと早く帰ってきてるのに、作ってないわけ？」

作る元気もなかったんだと言うと、

「俺だって疲れてるんだよ。じゃあ、どうするんだよ？」

そう、だよな。

疲れて帰って来て、何もなかったら怒るよね。

そう思いながら、コンビニで何か買ってくると言うと、

「買ってくるってなんだよ！ 俺はいやだからな！

だいたい、買ってくる金なんてあるのかよ。」

お金・・・お金が、ない・・・

今、コンビニでおにぎりやサンドイッチを買うくらいのお金はある。

それでも、買ってくるよりは作った方がいいに決まってる。

やっとの思いで立ち上がったとき、ふと思い出したことがあった。

(そうだ、あそこに。)

引き出しの奥を見ると、カップ麺が2つあった。

「ごめん、これで、いい？」

カップ麺をおずおず差し出すと、

着替えながら、ご主人様は猫をちらっと見て、

「・・・うん。」

涙がでた。

カップ麺に救われたような気がした。

そして、無理をしても、晩ご飯を作っておけばよかったと後悔した。

「晩ご飯も作れないほど疲れるんだったら、辞めたら?」

辞めて、すぐ次ってわけにはいかないんだよ?

カップ麺にお湯を注ぎながら言うと、ご主人様は黙ってしまった。

辞めたら困るくせに。

何も解決法がないのなら、辞めればなんて気安く言わなければいいのに。

そう思いながらご主人様を見ると、

いつの間にかテレビをつけて、

声をたてて笑う横顔がそこにあった。

いつも機嫌の悪いオーナーがなぜかその日はにこやかだった。

「あんたに大事な仕事を教えるよ。」

それは、お金を扱う仕事だった。

今までずっとオーナーが一人でやっていたのだった。

元々、猫の仕事はお金を扱うことではないのだ。

それに、その仕事はお店を閉めてから始めるので、

家に帰るのがかなり遅くなる。

休みの日も出てこなくてはいけなくなる。

身内の人は? と訊くと、

「あの人は、私の大事な子供と孫の世話があるからね。」

と、事も無げに言う。

猫にだって、家の仕事がある。

今でもようやくなのに、これ以上遅くまでなんて無理だ。

また、ご主人様が不機嫌になる。

そして、ご主人様が疲れて帰ってきてても家に誰もいない、というのは避けたい。

それに、

今だってそうなのに、その仕事に関わったりしたら、

間違いは全部猫のせいにされるに決まってる。

下手したら、こっそり盗んでるなんて言われかねない。

それは無理だと断ると、途端にオーナーの機嫌が悪くなる。

「あたしが教えてやるって言ってるのに、なんだ！ その態度は！！」

それから、いや、今から考えると、

その前からそうだったのかもしれないが、

猫が言ってもいないこと、してもいないことを

勝手に、言った、やったと思い込んで、オーナーは怒るようになった。

怒っている言葉を聞いていると、猫には全く心当たりがないことばかりだった。

「何のことですか？」

と訊き返すと、

「しらばっくれて！ ○○のことだよ！

あんた！ そう言ったじゃない！」

言ってないです、と言ったが最後、

さんざん怒鳴られたあげく、嘘つき呼ばわりされる。

何度もそれが繰り返され、

流石に、猫も黙ってはいられない日がやってきた。

「いい加減にしてください！

なんでいつもそうなんですか！

知らないと言ってるじゃないですか！」

猫の勢いにオーナーも黙るしかなかった。

もう限界だった。

ここで働くのも、ご主人様の傍にいるのも。

もう、嫌だ・・・

誰か、助けて・・・

猫を助けて・・・

居場所 その2

昨日は、猫の誕生日だった。

ご主人様は、猫の誕生日を覚えてはいなかった。

お義母さんと義弟の誕生日は忘れたことはないが、

猫の誕生日など、覚えてすらいない。

猫も言わなかった。

「今日は猫の誕生日だよ。」

とは。

夜になって、寝る時間が来ても、

ご主人様から

「おめでとう」

の言葉は聞けなかった。

ご主人様も仕事で忙しいのだからしょうがない。

そう思うしかなかった。

それでも、横にはなったものの、いつまでも眠れなかった。

寂しい。

いつまでこんな思いをすればいいのだろう。

死ぬまで、こんな思いを持ち続けなければいけないのだろうか。

自分以外が関わってくることに、何かを期待してはいけない。

それが叶わなかったとき、受けるダメージはとても大きい。

期待していなければ、がっかりすることはない。

ああ、やっぱり。

そう思えば済む。

よく、わかっている。

わかっているが。

月の明るい夜だった。

起き上がって、ベランダに出る。

この部屋は3階で、

ここに来たときは、遠くまで眺めることができたのだが、

高い建物が次々にできて、それもできなくなっていた。

目の前の、電気の消えた暗い窓の群れ。

あの窓の中は、皆幸せなんだろうか。

楽しい夢をみているのだろうか。

ため息と共に部屋に入り、パソコンの前に座る。

しばらく何も映っていない画面を、何ともなしに眺めていた。

月に照らされて映る自分の影に気がついて、輪郭をなぞる。

少しの間、現実から離れよう。

電源を入れて、仮想の世界を彷徨うことにした。

少しは気が紛れるかも知れない。

ご主人様の仕事には、パソコンはなくてはならない物だった。

インターネットも、お金がないからとの理由だけで、

猫からとりあげられることはなかった。

どれくらい彷徨っただろうか。

もう丑三つ時に近い頃、ある町にたどり着いた。

そこでは、何人かが、男性なのか女性なのかはわからなかったが、話していた。

とても楽しそうだったので、しばらく彼らの会話を見ることにした。

次から次から言葉が表れて、

冗談を言い合い、貶し合って笑い合い、

本当に楽しそうだった。

・・・あの中へ、入ってみたい。

いつの間にか、そう思うようになっていた。

中へ入って、一緒に笑ってみたい。

でも、突然入って行って、受け入れてもらえるだろうか。

それとも、しらけて、会話が止まってしまうだろうか。

悩んだあげく、思い切って入った。

「今晚は。初めまして。」

「おはつー」

「初めましてー」

そこにいる全員が猫に挨拶をしてくれる。

なんだかそれだけで救われた気がした。

そして、猫が見ていた会話と同じ暖かさで、猫に話しかけてくれる。

嬉しかった。

涙がでるほど嬉しかった。

久しぶりに笑っていた。

とりとめもない会話だったが、とても楽しかった。

皆と別れた後も、心が温かかった。

安心して眠ることができた。

それから毎晩、ご主人様が眠ってから、その仮想の町に行った。

新しい友達も沢山できた。

毎晩、楽しかった。

仕事で嫌な事があって、

そのことを話すと、親身になって聞いてくれた。

「ごめんね。聞いてあげることはできないで。」

みんながそう言ってくれた。

いいんだ。

聞いてくれるだけで。

それだけで、気が済む。

うんうん、と相槌をうってくれるだけでいい。

たとえ、会って話せなくても、

ぎゅっと手を握ってもらえなくても、

いいんだ。

聞いてもらえるだけで。

それだけで満足なんだ。

それだけでも満足なのに、

「大変だったね。」

と言ってくれる。

「そんなの、おかしいよ！」

と、一緒に怒ってくれる。

・・・ありがとう

そうか。

ずっと猫が欲しかったのは、これだったんだ。

いいんだよ、と。

猫は猫でいればいいんだよ、と。

間違っていないよ、と。

ずっと誰かに言って欲しかったんだ。

やっと、やっと、言ってもらえた。

それも、顔も知らない人達に。

たとえ、それが、文字だけだったとしても、

こんなに勇気付けられるとは。

こんなに温かく感じられるとは。

これで、まだ頑張れる。

ありがとう。

『メッセンジャー』というパソコンによるインターネットのシステムがある。

あった、というべきか。

インターネットでIDをお互いに登録すると、一対一で話せるというシステムだ。

携帯では通信料が発生するが、そのシステムは無料でいくらかでも会話できるのだ。

今はラインがあるので、メッセンジャーは必要ではなくなってしまったのだが。

仮想の町の中で、より親しくなった友人達とはそれで話すようになった。

町で話すと、不特定多数に見えてしまうので、

見られると困る会話はメッセンジャーです。

メッセンジャーに接続すると、IDが点灯する。

「おかえりー」

「ただいま」

ひとしきり会話をすると、仕事のある仮想の町の友人達は、

夜中の2時くらいには皆眠りにつく。

猫も仕事のある前日は同じくらいに別れを告げる。

だが、いつもたった一人だけ、必ず残る友人がいた。

朝早く目が覚めて接続したときも、まだ残っている。

あまり二人きりで話したことはないが、

猫にメッセージの使い方を教えてくれたのはその人だった。

いつもいつも一つだけ点灯している ID。

何をしているのだろう？

いつも疑問に思っていた。

「何してるの?いつも朝までいるね。」

話しかけたのは猫の方からだった。

「おや話しかけてくるなんて珍しいね。」

なんにも。

ただぼーっとネットサーフィンしてるだけ。」

「そうなんだ。」

誰かと話してるわけじゃないんだ？」

「話してないよ。」

みんな寝ちゃうからね。」

「寝ないの?」

「うん。」

これから寝て、昼間ずっと寝てて、夕方起きて仕事に行く。」

ふむ。

なるほど。

その日から、

いつも一つだけ点灯しているその ID に話しかけるのが猫の日課となった。

同類のニオイ その1

ご主人様は同級生だった。

心惹かれたのは、同じニオイがしていたからかもしれない。

『孤独』のニオイ。

『自由のない』ニオイ。

愛されたい人に愛されない孤独。

誰一人、味方のいない孤独。

何も、許されない世界。

何も、与えられない世界。

押しつけられ、自由に息もできない世界。

『ありのまま』で、いられない世界。

同じ、ニオイ。

同じニオイを持つひと。

同じニオイを持つひとなら、

猫の味方になってくれるかもしれない。

『猫』をわかってくれるかもしれない。

一緒に、歩いてくれるかもしれない。

猫を想ってくれるかもしれない。

猫を必要としてくれるかもしれない。

もし、そうならば、

何があっても、貴方の味方でいよう。

精一杯、貴方を愛そう。

そして、全力で、貴方を護ろう。

やがて、同じニオイを持つそのひとは、猫のご主人様になった。

やっと、

猫を理解してくれる人ができた。

猫が好きだと、言ってくれる人ができた。

猫の味方でいてくれる人が、できた。

なんて、なんて幸せなんだろう。

毎日、会うことはできなくなるけど、週末には、きっと会える。

猫は、嬉しかった。

こんなに嬉しいことはなかった。

こんなに幸せなことはなかった。

それからずっと、

ご主人様だけを、見つめて、

ご主人様のことだけ、想っていた。

ご主人様も同じだろうと思っていた。

しかし、ご主人様は、猫の想いと違っていた。

猫と会えなくても、平気だった。

寂しいとも思っていなかった。

毎週会えると思っていたのに、会えるのは、月に一度だった。

何ヶ月も会えない時もあった。

我慢できずに電話をするのは、いつも猫の方だった。

「なんか用？」

それがご主人様の最初の言葉だった。

久しぶりに会っても、気に食わないことがあるとすぐ帰ってしまった。

次に会う約束など、したことがなかった。

我慢できずに電話するのは、いつも猫だった。

「何か用？」

「今週？ いや、忙しい。」

ある日、約束もせず、ご主人様に会いに行った。

黙って会いに行った。

ご主人様はなんと言うだろう？

どんな顔をするだろう？

驚くだろうか？

嬉しそうにしてくれるだろうか？

そんなことを考えながら、ご主人様の乗るバスの停留所で待った。

何本もバスを見送ったが、ご主人様は来なかった。

待つのは平気だった。

もう慣れっこになっている。

でも。

もう、帰ってしまったのかもしれない。

友達と、街に出たのかもしれない。

今日は、土曜日だから。

次に、バスが来たら乗ろう。

あきらめて帰ろう。

そう決めて顔を上げると、ご主人様が歩いてくるのが見えた。

白いスポーツバッグを肩から下げて、真っ直ぐこっちへ来る。

髪が、伸びたんだね。

ご主人様が少し違う人のように見えた。

猫に気がつくと、

「なんているの？」

驚いた顔で、言う。

「俺が電車で帰ってたら、どうする気だったの？」

ご主人様は、少しも嬉しそうじゃなかった。

むしろ、迷惑そうに見えた。

コーヒーでも、飲んでいく？

お昼ご飯は食べたの?何か食べていく?

そんな言葉を期待していたが、ご主人様はさっさとバスに乗り込み、

座席に座ると、腕組みをして、目を閉じた。

そのまま話すこともなく、猫は自分の家の近くのバス停で降りた。

ご主人様と猫の温度差は歴然としていた。

猫がご主人様を想う気持ちの、

10分の1、いや、100分の1もご主人様は猫を想ってはいない。

それがわかっていながら、なぜ「さよなら」が言えないのか。

猫が好きになった人が、初めて猫を好きだと言ってくれたから。

一番理解してくれて、心の支えになってくれていると思っていたから。

それを離したくはなかったから。

もっと早く、ご主人様から離れるべきだった。

そうすれば、お互いに苦しなくて済んだ。

猫の存在がないに等しいあのときなら、猫が苦しむだけで済んだだろう。

猫が電話をしなければ、そのまま無くなってしまった関係だったのだから。

居場所 その3

いつも朝まで点灯している ID に話しかけるのが、日課になってだいぶ経った頃、

「猫、好きだって言ったよね？ 飛行機。」

見に行かない？

今度の金曜日、休みとったんだよ。」

そんなこと、覚えていてくれたんだ。

3階のこの部屋から、

遙か彼方に羽田から飛び立つ飛行機を見ることができた。

風向きによって、飛び立つときと、舞い降りるときがある。

地面を離れる瞬間を見ることはできなかったが、その後の姿を追うことはできた。

飛び立って、旋回して飛んでいく。

真っ直ぐ、真っ直ぐ。

あれは、どこへ行くのだろう？

たまに、こちらへ向かってくる飛行機もあった。

それぞれの行く先に、心を馳せた。

その時間がとても好きだった。

小さく小さく見えるはずの飛行機を、待っている時間も好きだった。

ベランダに出て、ぼんやり眺めているときがとても好きだった。

「行こうよ。」

なんで？

「猫に会ってみたいし。」

会ったら、がっかりするよ。

猫は、こんな性格だし、とっときの美猫ってわけじゃないし。

きっと、がっかりするよ。

がっかりして、

そして、話しかけても応えてくれなくなったら・・・

もう、何もなくて、

自分に自信がないから、

自分自身の何かをアテにすることもできなくて、

ご主人様が、本当は猫を必要としてなくて、

家族とも思ってなくて、

お義母さんの代わりでしかなくて、

それを知って、何もなくなって、

もう、何も無いのに、

やっと見つけたと思った居場所までなくなってしまったら。

「行っちゃだめって言う家族がいるの？」

ご主人様のことは、誰にも話したことはなかった。

本当は、その痛みの方が大きかったのだが、話せなかった。

本当に苦しいことは、口には出せない。

心の底の方に澱のように溜まっていく。

誰にも、話せない。

子猫の頃の、あのことも。

誰にも話せない。

お父さんにもお母さんにも、ご主人様にも言えなかった。

忘れたいのに、忘れられない。

底に溜まったまま、粘土のように固まって浮いてこなければまだ救われる。

なのに、泥水を混ぜたときのように、浮いてくる。

気持ち悪い。

思い出したくない。

誰かに言ってしまいたい。

嫌なのだ、と。

どうにかしてくれ、と。

なのに、誰にも言えない。

『家族がいる』

と、嘘をついた。

猫はご主人様の、家族ではないのだから。

嘘をついたことになる。

ご主人様の存在を知られなくなかった。

この場所の、この優しい人達は、ご主人様の代わりをしてくれているのだ。

猫がご主人様のお義母さんの代わりだったように、

猫もご主人様の代わりをさせてしまっているのだ。

そのことはよくわかっていた。

猫の心の拠り所だったご主人様。

それが無くなって、やっと見つけた『居場所』。

唯一残った『居場所』を失いたくはなかった。

ここにいられるなら、

この人達の中にいられるなら。

「会えない。」

「なんで？」

「きっと、がっかりする。」

「なんで？ しないよ？ 猫は猫でしょう？」

『猫は猫』

猫は猫のままで、いいから、と。

「行こうよ。」

うん。

行きたい。

あの、小さく見える飛行機が、すぐそこに見える所に。

エンジンの響が、聴こえる所に。

行きたい。

行くよ。

一緒に。

別れの風景1 義弟 その1

猫はご主人様の前で鳴いたことはなかった。

鳴きたいときは、声を殺して隠れて鳴いた。

ご主人様も、猫の前で涙を流したことはなかった。

もうご主人様を護る気持ちも、傍にいたいという気持ちもなくしかけていたので、

目を合わすこともほとんどなくなっていた。

何か話しても、ちゃんと聞いてくれてはいない。

話すこともなくなっていた。

ご主人様が猫に話すこともなかった。

後片付けをして部屋に戻ると、テレビを観てたご主人様と目が合った。

とても不機嫌な顔をしていたので、

「なんでそんな顔するの。」

と、負けずに不機嫌な顔と声で言ってしまった。

途端に、ご主人様の目から涙があふれ出した。

なんで？

なんで泣くの？

猫は慌てた。

何があっても泣かないご主人様が泣いてる？

猫のせい？

猫が不機嫌な声で訊いたから？

差し出されたタオルを受け取りながら、ご主人様はテレビの画面を指さした。

そこには、死にゆく弟を兄が見送る場面が映っていた。

ノンフィクションの番組だった。

「可哀想だ。あんな風になったら・・・」

弟。

弟のためなら、涙がでるんだ。

・・・どこまでいっても、『家族』が大事、か。

ご主人様の弟。

6つ年下の義弟。

初めて会ったときは、小学生だった。

柔らかいさらさらの髪をしていた。

高校を卒業して、バイクの免許を取ったからと、猫を後ろに乗せたがった。

突然遊びに来て、漫画を読みあさったまま寝てしまっていた。

鍋の中身を、

「どれが食べたいの？」

と、いつも取り分けてくれた。

「お義姉ちゃん！」と、いきなり抱きついてきた。

義弟は、小さい頃から『おとうと』だった。

ずっと『おとうと』だった。

あれは、義弟が高校生の時だった。

バイト代が入ったから、セーターを選んで欲しいと言われ、一緒に出掛けたことがあった。

あれは？ これは？ と選びつつ、広げて義弟に見せると、

彼は選ぶ手を止め、その都度鏡の前に立ち、あててみていた。

その日は平日の午前中で、おまけに雨が降っていた。

他にお客さんも見当たらなかったのも、暇をもてあましていたのだろう。

女性の店員さんが二人、ニコニコと寄ってきて、色々勧め始めた。

義弟が愛想良く振る舞っていたので、店員さんも益々あれやこれや勧める様子。

それぞれ手に持って、義弟の体にあてたりしている。

そして、気がつくとは何か、義弟と猫の間に割り込んでくる。

あまり気にせず選んでいると、義弟に似合いそうな形と色のセーターを見つけたので、

「これは？」

と、渡そうとした。

「ああ！ そんなの！ それよりこっちの方がいいわよ！」

と、ナチュラルにダメ出しをされ、割り込まれてガードされ、渡すことができなかった。

うーん、どうしたものか。

セーターを差し出したまま、一瞬途方に暮れたが、

仕方なく元の場所に戻し、その場を離れた。

まあ、猫が選ぶより、プロを選んだ方が確実だろう。

他の場所でジャケットを見ていると、

「なんでいてくれないんだよ！」

の、抗議の声。

なんでって、と、思いつつ振り向くと、

目の前にあったのは、渡せなかったセーターだった。

そのまま視線を上げると、義弟のむくれ顔。

ああ、

こんなに大きくなったんだね。

改めて思う。

でも、

そのむくれ顔はかわらないんだね。

小さい頃のままだ。

むくれ顔とセーターを交互に見ながら訊く。

「それ、買うの？」

「うん。」

「あててみた？」

「うん。」

「よかった？」

「うん。」

「そっか。」

「うん。」

それより、なんでいなくなっちゃったの？

一緒に見て欲しかったのに。」

「いやあ、店員さんがガードして近寄らせてくれなかったから。」

それに、プロの方がセンスいいし。」

「あんなのいいんだよ！

だから、一緒に見てよ！」

気がつくと、義弟のもう片方の手にも猫が選んだセーターがあった。

まさか、全部買う気じゃなからうね。

まさか、ね。

手をひく勢いの義弟に引っ張られるように移動していたのですっかり忘れていたが、

これも似合いそうと手に取ったジャケットを持ったままだったことに気がついた。

「もう～！『邪魔だからあっち行って！』って言えばいいんだよ。」

意地悪されたんだったら余計にさ。」

と、言いながら振り向いた義弟に

「そんなん言えないよ。」

と、応えつつ、

「こんなのもあったよ。Bちゃん（義弟）見てたパンツに合いそう。」

義弟が持つセーターの上にジャケットを乗せる。

「そんなに金ねえ！」

いや、全部買う必要ないから。

気に入ったのだけで。

しかし、義弟はほとんど全部を買った。

レジでお金を払う義弟の背中を見ながら、

バイト代って、いくら入ったんだろう？

ちょっと出してあげたいけど、ねえちゃんも金がねえ！

ごめんよ。

心の中で、手を合わせた。

猫は

義弟が好きだった。

イケメンで、店員さんも服を選んであげたくなるような義弟が自慢だった。

なのに、ちょっとクールで生意気な義弟が自慢だった。

それでいて、猫には優しくて、甘えっ子なところが好きだった。

本当の弟のように好きだった。

それが、今は、

憎いのか、好きなのか、

許せないのか、許してしまえるのか、

わからなかった。

ただ、ご主人様を護るためなら、義弟に嫌われても仕方ないと思っていた。

それほど、ご主人様が大切だった。

ご主人様が、何よりも大切。

今は、その気持ちも、無くなりかけている。

画面に涙するご主人様を見ながら、猫は思う。

ご主人様は、猫がいなくなったとき、あんな風に泣いてくれるのだろうか。

、と。

居場所 その4

たとえ、どんなことがあったんだとしても、

それは兄貴とおねえちゃんの問題で、

俺の関知することではない。

だから、それが原因で、おねえちゃんを嫌いになったり、軽蔑したりはしない。

おねえちゃんは、おねえちゃんなんだから。

それが、義弟の、猫に対する最後の言葉だった。

ご主人様が、伝えてくれた言葉だった。

ご主人様から離れることが決まっていたときに、伝えられた言葉だった。

ご主人様がどんなつもりでその言葉を伝えたのかはわからない。

出て行くのを止めるなら今だぞ、と。

今なら、まだ許されるぞ、と？

ごめん。

もう、だめなんだ。

このまま、ご主人様の傍にいるのは。

頑張っても頑張っても、報われなくて、

いつまで経っても、代わりでしかないのは、

もう、いやなんだ。

身の丈にあってない力を、いつまでも出してはられない。

もう、疲れたんだ。

何も、与えられないのに、

どこからも、補給できないのに、

いつまでも、力を出し続けることはできないんだ。

ご主人様とすぐには会えないという時期が何年か続いたある日、

猫はいなくてもいい、突然言われたことがあった。

重いんだ、と。

いない方がいい、と。

やはり、と思った。

いない方がいい、とまで言われるとは思っていなかったが。

いつかはそう言われると思っていた。

苦しい。

息ができないくらいの悲しみ。

でも、

もう待たなくて済む。

振り回されないで、済む。

しかし、すぐに

「やっぱりいて欲しい」

と、言われ、ご主人様は人が変わったように優しくなった。

それから、ずっと、ご主人様に愛されていると、想われていると思っていた。

思い込んでいた。

だから、頑張ることができた。

でも、そうじゃなかった。

それを知ってしまったから、

もう、だめなんだ。

ごめん。

今の暮らしが辛いなら、ここへおいで。

猫のままがいい。

猫のままがいい。

そのひとは、そう言って両腕を広げてくれた。

猫のために。

誰の代わりでもない。

『猫』が、いい、と。

そのひとは、そう言った。

同じ事を、ご主人様に言って欲しかった。

でも、言ってくれたとしても、その言葉は猫に向けられてはいない。

猫が、ずっと言って欲しかった言葉。

想って欲しかった心。

そのひとは、猫にくれる。

そして、待ってる、と言う。

行きたい。

そこへ。

猫の他愛のない話を、ちゃんと覚えていてくれる、

猫の居場所をくれる、

そのひとの所へ。

でも、ご主人様が、独りになってしまう。

猫がいなくなったら、誰もいなくなる。

親しい人もいない。

友達もいない。

『家族』以外に信じる人もいない。

そして、猫がいなくなったら、

誰も、味方がいなくなる。

猫は、ご主人様を置いていけるのだろうか。

この、長い間、

辛いことばかりじゃなかった。

楽しかったことも沢山あった。

ずっと会いたいと思いつけて、会えたときの喜び。

二人で、いつまでも街中を歩いたこともある。

何をするでもなく、ぼんやり公園のベンチに座っていたこともある。

二人で笑ったことも、沢山ある。

春と夏と秋と冬と、何度一緒に過ごしたのだろう？

その時間を捨てて、行けるのか。

そんなことが猫にできるのか。

今だったら、まだ、ご主人様の傍に居続けることはできる。

黙って、あの優しい人達と連絡を絶って、

猫に『居場所』をくれる人達全てと、縁を切って。

『ここ』が居場所なんだと、今まで通り思い込んで、

猫が、猫のままでいたいと望まなければ。

そんなことができるはずがない。

考えただけでも、壊れそうさ。

それでも、

もし、ご主人様が、本当に猫を必要としてくれているのだったら。

あの優しい人達が代わりをしてくれていることを、当のご主人様が取り戻してくれるなら、

猫の『居場所』を取り戻してくれるなら、

『ここ』にいられる。

でも、どうやって、伝えればいいのか。

どうやって？

猫は、思い切ってご主人様に訊いてみた。

「猫を、欲しいって言う人がいるんだけど、行ってもいいかな。」

ご主人様は、猫をまじまじと見た後、言った。

「行けば。」

目の前が真っ白になった。

ご主人様の言葉は、聞き間違いと疑うことなく猫の心に響いた。

「行けば。」

空しさと冷たさが心を浸食していく。

「なに、それ？」

と、怒ってくれたら、

冗談、と、笑うつもりだった。

そして、話すつもりだった。

猫の居場所をください、と。

わかってくれるまで、話すつもりだった。

でも、

心のどこかで、ご主人様はそう言うだろうと思っていた。

聞き間違いと少しも疑わなかったことが、その証拠だった。

終わった・・・

なにも、かも。

「うん。行く。」

テーブルに視線を落として言った。

テーブルに落ちた水滴を見ながら、言った。

ご主人様にとって、猫の存在って、なんだったんだろう。

もう、何も聞こえてこなかった。

音のない、白い世界に、猫は座っていた。

別れの風景2 ご主人様 その1

ご主人様から離れたいと、お母さんに言ったことがある。

それを聞いたとき、お母さんの唇がわずかに震えたのを覚えている。

猫のお父さんとお母さんには言ってなかった。

ご主人様が本当に愛されたいのは、お義母さんだ、ということは。

お母さんは

「可哀想だ。」

と言った。

ご主人様が独りになって、可哀想だ、と。

もっとよく考えなさい、と。

なんで、離れたいのかとは訊かれなかった。

いつも、猫の言い分は無視される。

たとえ、言ってたとしても、反対されるだけだろう。

よくわかっていた。

それでも、聞いてくれるかと、話してみたのだったが。

結果は予想通りだった。

猫がお父さんとお母さんに黙って、ご主人様から離れてから、

初めて電話にでた猫を、二人は罵倒した。

なんで相談もしないで、黙って出たのか、

これからどうするんだ、

挙げ句の果てに、無責任だ、と。

猫の気持ちも考えず、自分の気持ちだけをぶつけるのは、変わらないんだね。

「なんで、猫の気持ちを考えてくれないの？」

つらかったのは、猫の方かもしれない、ってなんで思わないの？

自分達の方が、つらかったわけ？」

言うだけ言って、電話を切った。

そして、着信拒否にした。

何度も電話がかかってきているのは知っていた。

それでも、一生でも、電話にでないつもりだった。

電話が着信拒否になっていると知ったのか、今度は手紙がきた。

住所を教えていなかったのに、だ。

中を見ると、泣き言と文句でいっぱいだった。

読み終わって、言った。

「猫は、間違ってる？」

誰に問うでもなく、独り言のように、つぶやいた。

猫を受け入れてくれたそのひとは、黙っていた。

黙ったまま、猫を抱きしめてくれた。

猫のために広げてくれていたその腕で。

眠っているときも、ご主人様の夢をみた。

猫は責められ、泣きながら叫ぶ。

「なんで、そんなこと言うの！」

ぎゅっと抱きしめられる感覚で目が覚めると、

「大丈夫だよ。俺がいるよ。」

そのひとが言う。

そのひとの腕の中で、猫は泣きながら眠りにつく。

泣き疲れて、眠りかけた猫に、そのひとは言った。

「それは、猫が決めることだよ。」

「行けば。」

ご主人様はそう言ったが、

それが本当のことらしいと知ると、

いつも不機嫌な顔でいるようになった。

あの時は、猫が本気で訊いたとは思っていなかったのだろう。

たとえ、冗談だったとしても、

本当に嫌ならば、怒ってくれればよかったのだ。

「だめだ。」

と、一言言ってくれればよかったのだ。

それから、本当のところはどうなのか猫に問いただすこともせず、

理由も訊かず、

ただただ、止めていた煙草を大量に吸い、

ウィスキーをストレートで毎日飲み、鬱々とするようになっていた。

猫は、迷っていた。

ここにきて、猫が『居場所』を必要としているように、

どちらも猫を必要としている、ということがわかってきていた。

猫しかいないご主人様。

現実でも仮想でも友人の沢山いるそのひと。

猫がいなくなっても、そのひとは独りじゃない。

でも、ご主人様は独り。

ご主人様を選んだら、全てのあの優しい人達から縁を切らなくちゃいけない。

今はご主人様は、猫の方を向いていてくれるけど、

時間が経ったら、忘れてしまうかもしれない。

そのとき、猫はどうなる？

また、繰り返すのか？

あのとき、離れていればと、また思う気なのか？

そのひとを選んだとしたら、

今は、張り合う相手がいるから、単にそういう気になってるだけかもしれない。

それがなくなったら、猫はいらなくなるかもしれない。

そうしたら、猫は、全てを失うことになる。

でも、『居場所』は残る。

猫は、迷っていた。

このときは、『ネコは一匹でも生きていける』などと、とても思えなかった。

ご主人様が出掛けるとき、

ベランダから、手を振るのが猫の日課だった。

ご主人様も振り返って、ちょっと手を挙げる。

猫はかかさず、ベランダで見送っていたが、

あのときから、ご主人様は振り返ることはしなくなった。

それどころか、わざと逃げるように足早に歩み去っていく。

なんで、そんなに意地をはるのか。

伝える努力もせず、荒れた様相を見せつけるだけで。

嫌なら嫌だと、泣いても、格好悪くても、言えばいいのに。

拒絶されても、嫌なんだと、言えば、あるいは。

荒れていくご主人様を見て、冷めていく心と、

こんな風にしてしまったのは猫なんだという罪悪感。

職場でも責められ、家でも責められて、

猫の精神は少し傾いてしまっていた。

それを心配して、仮想の町で一番仲のいい女友達が、初めて電話をくれた。

部屋を出て、台所で食器棚に寄りかかって座った。

パソコンで話すときのように、心地いい時間が過ぎていく。

「大丈夫だよ。ありがとう。」

電話を切って、部屋に戻ると、ご主人様が目を血走らせて猫を睨んで怒鳴った。

「何楽しそうにしてるんだ！」

俺にはあんな風に笑ってくれないくせに！

何楽しそうにしてるんだ！

何で笑ってるんだよ！」

笑って、くれない？

あれから、ご主人様の前で笑ったことはなかった。

いつも、いつも、顔も見ず、目をそらし。

言葉も交わさず。

なんで？

なんで、って！

こっちが訊きたい！

なんで？ 今更！

貴方が、最初に猫なんていらなんて、

いなくても大丈夫だって、

ちっとも寂しくないって、

重たいから、いない方がいいって、

いて欲しくないって！

猫が会いたくても、忙しいからって、

会いに行っても、ちっとも嬉しくない迷惑だって、

電話しても、

「なんか用？」

って、

いつも、いつも！

なのに、今頃になって、「なんで笑ってくれない！」なんて何故言う？

猫を笑えなくしたのは、誰なんだ！

貴方じゃないか！

『家族』じゃないって、言ったくせに。

「行けば」って言ったくせに。

迷いもせず言ったくせに！

猫は、

護ろうと、思ったのに。

ご主人様を。

なのに、

こんな風に、猫が、した。

猫がしてしまった！

して、しまった。

悲しませて、苦しませて、

猫が。

俯せに寝転がり、大声をあげるご主人様に何も返さず、

そっと押し入れをあけて、布団を取り出し、廊下に出た。

・・・明日も、仕事がある。

ほんの少し前は楽しかった食器棚の前に、

布団を半分に折って敷き、中にくるまった。

ご主人様が、あんなに悲しむなんて。

でも、もう、だめだ。

もう、ご主人様を護る力もない。

もう、だめなんだ。

いっそ、消えて、しまいたい。

少しずつ、心が壊れていくようだった。

屈辱

ずっと誰にも話せなかったことがある。

まだ小学校に上がる前のこと。

親戚の家に一人で泊まりに行ったことがある。

そこには大好きな従妹がいて、一緒に遊ぶことができ、毎日とても楽しかった。

だが、ある日の夜。

猫は、子猫の頃から眠りが浅かった。

パジャマのズボンを引っ張られる感じがして、目を覚ました。

その途端、猫の上にかがみ込んでいる叔父と目が合った。

「おととと。」

慌てる叔父。

寝ぼけてることもあって、最初は何が起きているのか、よくわからなかったが、

寝ている子猫の上に屈み込むなんて、その体勢自体が異常だ。

だんだん怖くなって、しばらくそのまま固まっていたが、

足が涼しいのに気がついて、そーっと手を下にやると、

ない！

はいているはずのズボンがない！

パンツと肌に手が当たるだけだった。

「猫ちゃん、寝相悪いなあ。」

寝相が、悪い？

ズボン、足首に引っかかっているだけだった。

そして。

あっ！

脱がされた！

脱がされたんだ！

ズボンだけでなく、パンツも脱がそうとしてたんだ！

猫が目を覚ましたから、慌てて脱がしてる途中のパンツを上げたんだ！

突如襲ってくる恐怖。

声を上げたくても、声が出ない。

「ズボン、ちゃんとはいてなきゃダメだよ。」

何言ってるの？

猫が自分で脱いだと言いたいのか？

自分で脱がしたくせに！

自分で脱がしたくせに！

後から、吐きそうなほどの嫌悪感が襲ってきた。

嫌だ！

嫌だ！

汚い！

汚い！

気持ち悪い！

何も、されてなかつただろうか。

あのまま、目が覚めなかつたら。

パンツも脱がされて。

怖い！

眠ったら、またされるかもしれない。

その夜はずっと眠らず、次の日、お母さんに迎えに来てもらった。

お母さんは、急に迎えにきてと呼ばれたことでいらついていたようだった。

が、猫はそんなことにかまっていられなかった。

少しでも早く、叔父から遠ざかりたかった。

叔父は、家事もよく手伝い、子供の面倒もよくみると、親戚中で評判のいい人物だった。

あのとき、猫が何を訴えたとしても、誰も信じてくれなかつたらう。

寝ぼけたんだね、と、思われただけだろう。

それに、あんなことは、誰にも言えない。

汚くて、気持ち悪い、あんなこと。

親戚なので、顔をあわす機会も多かったが、なるべく遠くに離れていた。

何年も、それでおさまっていた。

が、突然、猫の家に叔父が泊まりに来た。

猫の家は、2 部屋しかなく、

ご飯を食べる部屋と、寝る部屋しかなかったので、どうしても4人で寝ることになる。

叔父の隣りに寝るのは、嫌だった。

何をされるかわからない。

子猫は先に寝なさいと言われ、一番手前に横になった。

奥にお客様用の布団が敷いてあったからだ。

夜中に、下半身をごそごそする感覚に目が覚めた。

目を疑った。

叔父が横に寝ていた。

そして、猫の下半身を直に触っていたのだった。

体が固まった。

恐怖と嫌悪感に声が出ない。

向こう側にはお父さんもお母さんもいる。

なのに、助けを求めることもできない。

そのうち、猫の手をとり、キスしたりなめたりし始めた。

やめて！

汚い！

気持ち悪い！

流石にその手は力を込めてもぎとった。

叔父は、猫の目が覚めた事に気がついたはずだが、

下半身を触るのを止めようとしな

れどころか、徐々に奥に指をいれようとする。

猫は、それ以上奥にいかないように、太股に力をこめる。

叔父も負けずに奥に入れようとする。

やめてよ！

気持ち悪い！

声がでない！

「かわいいね。」

叔父は、猫が恥ずかしがっているのだとでも思っているのだろうか。

嫌がっていると、何故思わない？

汚い！

気持ち悪い！

気持ち悪い！！

恐怖と嫌悪の呪縛から解けたように、

やっと動けるようになった両腕で、

その汚い手を下半身から、力いっぱい引き抜く。

「やめて！」

やっと掠れた声が出た。

それでも、お父さんとお母さんは気がつかない。

が、叔父は騒がれると困ると思ったのか、再び手を差し入れることはしなかった。

「なんだよお。嫌がらなくてもいいじゃないか。」

死ね！

死ね！！

一生苦しんでのたれ死ね！！

夜が明けても、やはりお父さんにもお母さんにも言うことはできなかった。

同じような経験をした方々が思う、

『汚れてしまった』という気持ちはなかった。

自分が悪かったのだ、という自分を責める気持ちも、罪悪感もない。

ただ、猫にあったのは『屈辱』だった。

力で、思い通りに振る舞われた『屈辱』。

そして、抵抗できなかった『屈辱』。

怖いと思ってしまった『屈辱』。

猫の気持ちを無視された『屈辱』。

そんな屈辱を、嫌悪を、恐怖を、誰かに言えるわけがない。

汚されたのは、体より精神だった。

体は、洗えば綺麗になる。

あの汚らしい這い回るような感覚は忘れられなくても、

体は、洗えば綺麗になる。

強姦、されたわけではないから。

ただ、精神は、もう。

どんなことをしても、忘れることはできない。

誰にも、言えない。

こんなこと。

お父さんにも、お母さんにも、ご主人様にも、言えなかった。

ずっと、ずっと。

ただ、ひとり。

猫を受け入れてくれた、そのひとにだけは、話せた。

「ぶっ殺してやる！」

そのひとは、本気で怒った。

猫が、びっくりするくらい本気で怒ってくれていた。

ありがとう。

あなたで、よかった。

あなたに会えてよかった。

あなたを選んで、よかった。

叔父は、その後、浮気をして、叔母と離婚して家を出た。

浮気相手にこき使われ、働けなくなると、追い出されて、

ぽつんと叔母の家の、元は自分が住んでいた家の縁側に座っていたそうだ。

叔母が、お茶を一杯出して、

「ここは、貴方の家じゃないから、もう帰りな。」

と、叔父が今住む場所へ帰ったそうだ。

それから、叔父の、元叔父の話は聞かない。

今、生きづらいのはお金がなかったから？ その1

猫の家は、ずっとお風呂のないアパートや社員寮だった。

学校から帰ると、銭湯へ行く。

混んでいると、とても肩身の狭い思いをしなければならない。

それがとても嫌だった。

なので、髪だけ洗って、体はお湯で塗らしたタオルを絞って拭くだけで済ますことも多かった。

猫は気がつかなかったが、たぶん、臭っていたこともあっただろう。

お風呂のある家が、羨ましかった。

お風呂どころか、

猫の家には、洗濯機も、冷凍庫のある冷蔵庫も、温めるだけのレンジさえなかった。

扇風機もなかった。

もちろん、エアコンなんてない。

何もなかったから、羨ましかった。

何でもある余所の子が羨ましかった。

家賃のない家に住んで、

お風呂も、自分の部屋も、電子レンジも、エアコンも、お金もある家の子供が羨ましかった。

何でもある家の子は、猫ほど汚い心を持ってははいなかったと思う。

何でもあるから幸せとは限らないとは、思いもしなかった。

お父さんとお母さんがいることが幸せだなどと、思いもしなかった。

何もないから、自分の中に『すごいもの』をさがした。

少しでも、片鱗をみつけると有頂天になった。

それはちっとも『すごいもの』なんかではなかったが。

そうなんだと、思い込んで、思い込もうとして。

自己満足を得るため、ちっぽけなプライドを護るため、一生懸命になっていた。

そのせいで、数え切れないほど無くした物があることに、気がつかなかった。

猫は、その頃の猫をひどく恥じている。

猫の中の傷ついた子猫を癒やせないのは、そのせいもある。

「仕方が無かった」なんて、思えない。

何も無いことを認めようとせず、

自分で造り出して育てようともせず、

誰もが持っているようなものを、

自分だけの『すごいもの』と思い込もうとして、

ムキになって、自分はすごいのだ、と、

尊大になって、調子に乗っていたあの頃の猫を、許すことはできない。

傷ついた子猫が、

「子猫を殺して！」

と叫ぶとき、

「希通りにしてやる」

と、何度思ったことか。

その度、押しとどまってきた。

癒やすこともしてあげられない。

殺すこともしてあげられない。

ごめん。

子猫は鳴く。

今も傷ついたまま。

今、生きづらいのはお金がなかったから？ その2

猫は、家が貧しいことを知っていた。

高校も大学も、お父さんとお母さんが一生懸命働いて、

行かせてくれていることをよくわかっていた。

なので、学用品以外は、毎月もらうお小遣いで賄うことになっていた。

猫は、本が好きだった。

本があれば、退屈な時間など少しもなかった。

そして、本は猫の精神安定剤でもあった。

本のない生活など考えられなかった。

今のように、綺麗な古本が安く買えれば、猫も少しはまともな格好をしていただろう。

その頃は、綺麗な古本などなかった。

古本といえば、表紙が黄ばんで破れていたり、印刷が薄くなり、

中も茶色くなってシミがついていて、

古本特有の臭いがしていた。

では、只で本が読める図書館は、というと。

猫の家から一番近い図書館は、町を2つ横切ってやっと着く所にあった。

教科書や参考書を持って行って、勉強するには素晴らしくいい所だったが、

肝心の『本』はあまりなかった。

古本屋に売っているより、少しましかな、というくらいの本ばかりだった。

開いてみると、書き込みがしてあったり、破れているときもあった。

—これじゃあね。

仕方なく、新しい本を買う。

新しい本は、高かった。

月に何冊も読む猫にとって、かなりな額になる。

お小遣いが、みんな本になってしまったこともある。

仕方が無いので、読み終わってからずいぶん経って、

内容を忘れかけた本を取り出して、また読み直す、を繰り返していた。

中学高校は制服があったので、そんな余分な気も、お金もまわさなくて済んでいたが、

大学生になったとき、着る服がなかった。

お母さんは、猫がおしゃれに興味が無いと思っていたようだが、

猫だって、綺麗で、格好良くて、おしゃれな服が欲しかった。

ただ、猫の思うような服は、値段が高かった。

「買って」

などと、気軽に言えるはずもない。

一番まともな服が、父方のお祖母ちゃんが買ってくれたネコの絵のついた服だった。

生地が丈夫で、色も綺麗だった。

大切に着ていたもので、汚れたり毛羽だったりもしていなかった。

理系の大学だったので、実習の間は白衣を着ている。

揮発性の薬品を使えば、絹などは変色するので、着てこない方がいいとまで言われていた。

それなら、このネコの絵のついた服でいい。

お金が貯まったら、もう少しいい服を買おう。

実際は、上手く服の方にまわっていかず、

結局、ネコの服は卒業するまで着ることになったのだが。

猫の家が、そういう家だということは、誰も知らないし、想像もしなかったと思う。

20代になっても、子供が着るような絵のついた服が、猫の趣味だと皆が思っていて、

センスが悪い奴と、思われていたようだった。

もちろん、誰も口にはしなかったが。

あるきっかけで、そう思われているということに気がついたのだった。

猫は、それでも、何も言わなかった。

服のことを言われても、黙っていた。

くどくど説明するのも面倒くさかった。

この頃には、あの『傲慢な猫』はすっかり形を潜めていた。

この頃は、ご主人様も優しかった。

猫の方を、ちゃんと見ていてくれた。

そのせいもあったと思う。

理系の大学は、実習とテストとレポートばかりだった。

頭も要領もいい友人達は、アルバイトもサークル活動もしていたが、

本ばかり読んでいて、ご主人様しか見ていなかった猫は、どれもこなすことができなかった。

学校から与えられる課題をこなすだけで、精一杯だった。

服が買えないのはひとえに、猫が要領が悪くて、なんでもこなせないからであって、

それについては、なんの言い訳もできなかった。

それでも、心は穏やかだった。

猫が大学にあがる前の年に、その頃住んでいた会社の社員寮が取り壊される事になった。

お母さんは、悩んだあげく、近くに中古の家を買った。

そこにはお風呂も猫の部屋もあった。

お風呂ー

猫が小さい頃、元叔父が言った。

「いいでしょう？ ここにはお風呂があって、いつでも好きなときに入れるんだよ。」

元叔父は早くから一戸建ての家に住んでいた。

猫が、なんて答えたかは覚えていないが、

「いいなあ」

とは言わなかった。

元叔父の口調と表情が、とても嫌な感じだったからだ。

それからずっと後になって、猫の結婚が決まった頃だった。

元叔父の浮気が原因で、叔母と離婚することになったとき、

元叔父は、その家を買ったお金を持って、浮気相手と一緒にいるつもりだった。

お母さんは、いち早く、家を叔母名義に変更し、売られずに済んだ。

そのとき、お母さんが言った事がある。

「あの家ね、叔母ちゃんの。

前の家もそうだったけど、あれを買うのに、お父さんとお母さんがお金を貸してあげたんだよ。

パン屋さんやるって言い出したときも、全部貸してあげたんだよ。

他の妹弟のもそうだよ。

だから、うちはずっと借家だったんだよ。

お金貸さなかったら、もっともっと前から自分の家に住んでて、

あんたにもあんなに我慢させずに済んだのにね。

でも、頭下げてお願いしますって言われたら、貸さないわけにいかないでしょ？」

頭の芯が痺れた感じだった。

うちは、お金、なかったんじゃ、なかったの？

うちは、お金が、なくて、

ずっと、ずっと、我慢、して、きて、

欲しい、ものも、我慢、して、

みんなある人が、羨ましくて、

何も、ないから、ちっぽけな、プライドを護ろうとして、

汚くて！ 嫌らしくて！ こんなちっぽけな『猫』でしかいられなくて！

こんなの、いつ人間になれるのか、わからないのに！

それが、それが！

更に、お母さんは言う。

「叔母ちゃんの家の名義替えるのにね、

生命保険を解約しようと思ったんだけど、途中で止めると損するから、

あんたが結婚するときにあげようと思ってたお金、あてちゃったの。」

もう、いいよ。

もう、どうでもいい。

お母さんは、猫が勉強さえできる環境だったら、それでよかったんだね。

その他のことは、何もいらないと、思ったんだね。

ずっと我慢してきたから、大丈夫だと思ってたんだね。

そんなに『お母さん』じゃなくて、『お姉ちゃん』で、いたかったわけ？

もう、いい。

どうでも、いい。

もともと、望まれて生まれてきた存在じゃないんだから。

お母さんが、お父さんを選んだときから、それは始まってたんだ。

お母さんをお嫁に欲しい人はお父さんと、もう一人いて、

その人はちゃんとした職業だったが、同じ田舎の人だった。

お父さんは、あまり働くのは好きじゃなかったが、都会の人だった。

お母さんは、口さがない田舎が嫌いだった。

おばあちゃんは、お母さんがお嫁に行かず、この家を仕切ることになり、

病弱な伯父をないがしろにされては大変と思い、

「帰って来てもいいから、一度はお嫁にいきなさい。」

と、言った。

一度、本当に帰ろうと思ったことがあったが、おばあちゃんは帰ってくるなど言ったそう
うだ。

それで、お母さんは、

「あれは、私を追い出すために言ったんだ。」

と、わかったそうだ。

ともかく、そのおばあちゃんの言葉に押されて、

都会に住んでいるお父さんの所にお嫁にきた。

が、

我が儘で、何もしなくて、それでいて神経質で、

あまり働くのが好きでない人の女房は大変だった。

すぐにも帰りたい素振りを見せていたのだろう。

お父さんは、流石にこれはまずい、と思った。

そして、考えた。

そうだ、子供がいれば、あきらめるんじゃないか。

そして、猫が生まれた。

お父さんと、猫の世話でお母さんは、とても苦労した。

猫の面倒を、お父さんが少しでもみる、はずもなかった。

いいんだ。

もともと、道具として生まれてきたのだから、

今更、もう、どうでもいい。

望まれて、可愛がられて、幸せに生まれ育った人達には、敵わない。

二十歳になったとき、お母さんが振り袖を買おうと、言った。

振り袖なんて、自分で着られないし、そのときしか着ないのに、100万なんて勿体ない。

普段、着る服に困ってるのに、100万の、そのときしか着ない着物なんて。

家のローンもあるのに、無理して買ってもらいたくない。

成人式のためだけに、着物着て、頭結って、お化粧して、写真撮ってなんて、したくない。

後で、猫を受け入れてくれたそのひとが、聞かされたのだろう。

お母さんのこのときの気持ちを話してくれた。

「ずっと、猫に振り袖を着せてあげたかったんだって。

そのためのお金は別にとってあったんだって。

なのに、勿体ないから、いいって言われて、悲しかったって。」

そんな、お金があったんなら、服を買って欲しかった。

毎月1着でも。

1万円の服なら、100着買える。

ずっと、うちにはお金がないから、って我慢してたんだ。

なのに、着物、なんて。

いらない。

もう。

今更。

何も。

義務教育 その1 給食は拷問

猫は体が小さく、食が細かった。

小学生のとき、一番つらかったのは給食だった。

メニューはだいたい決まっていて、

食パン2枚とマーガリン、おかず、牛乳。

おやつがちょっとついたかもしれない。

それでも、猫には量が多すぎた。

昼休み込みなので、だいたい食べる時間は20分あるかないか。

食べられないと、昼休みの間中食べていることになるが、食器を片付ける時間もあるので、

そんなに長くは食べてられないのだ。

それも、本人だけの問題ならまだ昼休みに遊べなくてもあきらめもつくが、

これがまた『班全員の責任になる』となると、更に問題が起こってくる。

猫の小学生の時は、近くの席の6人で班を組まされていた。

勿論、席はくじ引きなどで決まるので、友達同士で、とはならない。

そして、お決まりのように、男子と女子が3人ずつだった。

また、よせばいいのに、班の全員が食べ終わらなければ、

遊びに行ってもいけない、となっていた。

早く食べ終えて遊びに行きたい子は、いらいらして待つことになる。

「早くしろ！」

「お前のせいで遊びにいけないじゃないか！」

と、猫の机や椅子を蹴りながら怒鳴り散らす。

仲良しドラマのように、

「ナイショで少し食ってやるよ。」

とは絶対にならない。

猫は好き嫌いはなかったのだが、何しろ、量をこなすことができなかった。

おかずの量を減らしてもらったとしても、パンは必ず一人2枚。

食パン2枚は多すぎる。

おまけに、当時のパンは、何でこんなにまずいんだろう？ というくらいまずかった。

パンの耳は硬く、ふわふわのはずの中身もパサパサ。

マーガリンも、本当に食べ物か？というくらいまずかった。

変な油のカタマリを食べているようだった。

固形で、硬くなっているのに、上手く塗れずに、一部だけにこってりつく。

たまに、イチゴジャムのときもあったが、猫にはとても美味しいと思えなかった。

コッペパン、揚げパン・・・

どれも、食パンよりは『マシ』という程度だった。

今のマーガリンもイチゴジャムも、とても美味しくなっているのに、

未だにパンに塗って食べようとは思えない。

自分で作るサンドイッチにも、マーガリンを塗ることは無い。

イチゴジャムは、田舎での嫌な出来事も思い出させる。

給食は拷問だった。

食べられないのに、早く食べろ！ と蹴られ、怒鳴られ

残したくても、

『残さず食べましょう！』

の、クラスの決まり。

残すと、班の責任になり、

「お前のせいで！」

と、また怒鳴られる。

パンは口の中でぼそぼそして、飲み込めなくなる。

牛乳でパンを流し込もうとしても、

少し温くなった牛乳は、気持ち悪いだけだった。

せめて、ご飯だったら、よかったのに。

何度そう思ったことか。

給食のメニューをわざわざ食べたい、懐かしいと思えるのは、

当時、何の苦もなかったんだろうと、羨ましくさえある。

仕方なく、こっそりパンを机の中に隠す。

誰も見ていないときに、ランドセルに移す。

毎日その繰り返しだった。

猫のお母さんは、食べる物は決してケチらなかった。

お母さんのお母さんも、お金はなくても、子供達にお腹いっぱい食べさせてくれたので、

お母さんもそうするのだと、よく言っていた。

だからといって、高い食材を買ってきて料理するのではなく、

安売りの食材で、美味しい物をいつも作ってくれた。

好き嫌いがほとんどなかったのは、お母さんのおかげと言える。

給食のおかずの記憶はない。

友人は、まずかった、と言う。

猫はそれよりも、パンの量がつらかったので、おかずの事までは覚えていないのだろう。

猫の子供の頃は、『個性』というものは無視されていた。

人には向き不向きがある、ということは、

すっかり忘れ去られ、鍵のかかる棚の奥の方に仕舞われていた。

「できない？ そりゃ、努力が足りないからだ。

ほら、あの子はできるだろう？

なのに、なぜお前はできない？

できるはずだ。」

あの子はできても、この子はできないのだと、

今ではわかることも、

当時は全員がこなさなければいけない事項だった。

どうでもいいことに時間を割いて、かなり無駄にしてきたと思う。

全てが無駄だとは言わないが、はっきりと無駄だったと言い切れる事もある。

猫に向いていたこと、やりたかったことは、もっと他にあったのに。

あの時間を全部それに充てられたら。

そして、足の引っ張り合いだった。

いいところを誉めるのではなく、ちょっとした失敗を糾弾するのが常だった。

ホームルームは、誰かの、もしくはクラス全員の失敗を曝し、吊し上げる時間だった。

競争。

体罰。

いじめ。

助け合いの精神などは一切なく、少しでも競り勝って上へ行けという教育。

『班』一つにしても、『助け合って』では決してない。

そんな教育を受けた人間が、困った人を『助ける』なんてできるわけがない。

それができる人は、自分の子供の頃のそれが嫌だった人だろう。

誰にも誉められず、怒られ、貶されるだけの猫は、どんどん自信を失っていく。

別れの風景3 ご主人様 その2

ご主人様と職場のことで、ストレスから猫は食事ができなくなった。

それに、こんな状態で、ご主人様と向かい合って食事なんてできるはずもなかった。

ご主人様も同じ気持ちだったようだ。

家で食事をするのを極力減らしていたようだった。

だんだん痩せていく猫を心配してくれたのは、女友達だけではなかった。

「ご飯、ちゃんと食べたの?」

そのひとが訊く。

いつものように、メッセージャーで夜中に話していたときだった。

うん。

「食べてないね。」

食べたよ。

「俺も食べてないんだ。」

一緒に食べよう。」

一緒に?

一緒になって、無理だよ!

だって、ご主人様が!

「1時間くらいで着くから。」

ちょっと待って！

そのひとは、有無も言わず、メッセージを閉じた。

どうするか決めろ、と言っている。

そこを出るか出ないか、

今、決めろ、と。

そんなになってまで、『そこ』にいる意味があるのか？

『そこ』にいて、幸せなのか？

問われている。

「猫は、どうしたいの？」

仮想の町の友人が言った。

「相手の事ばかり考えてるけど、猫はどうしたいの？」

猫、猫は

ほんとは

もう、いやなんだ。

今更、必要だなんて言われても。

家族じゃないと言われ、

猫を欲しい人の所へ迷わず「行けば」と言えるご主人様の所にいたくはない。

たとえ、

ご主人様の所に残ったとしても、

ご主人様は猫の心が離れていこうとしたことを忘れはしないだろう。

そして、一時は猫を思いやってくれたとしても、いずれ、忘れて元に戻るだろう。

そのときに、猫は後悔するだろう。

必ず、するだろう。

でも、それでも、

猫がいなくなったら、ご主人様が独りになってしまう。

ご主人様を、こんな風にしてしまったのは猫なのに。

泣かせて、苦しませて

猫が

「猫は、どうしたいの？」

そのひとは、猫にはご主人様がいると知ってから、猫が鳴く度に一緒に泣いた。

猫を抱きしめて、ずっと泣いてくれた。

しかし、猫がだんだん痩せて、精神が傾き始めたときから、そのひとは一切泣かなくなった。

猫が鳴いても、猫を抱きしめたまま、じっと耐えるように黙っていた。

反対にご主人様は、怒鳴ったり泣いたりするようになっていた。

猫の罪悪感は募っていくばかりだった。

こんな風にしてしまった。

猫が。

こんなご主人様を、おいていけるのか。

「俺だって、猫と一緒に暮らしたい。」

細い背中、華奢なうなじを見せて、そのひとはぼつりと言った。

猫は、黙っていた。

そのひとの指の間から立ち上る紫の煙が、細く真っ直ぐになるまで。

決められないよ。

猫はどうしたら、いいの？

「もう、限界なんだよ！

自分でもわかってるんだろう？

そこにいたら、猫が壊れるってこと。

だから、決めろ！ 今！」

ディスプレイの灯りだけの部屋。

そのひとの声が聞こえてくるようだった。

暗闇の中、

コートに袖を通し、部屋のドアを開けたとき、

「猫！」

いつの間にか目覚めていたご主人様の声。

猫は部屋と廊下の間で固まった。

別れの風景4 ご主人様 その3

ドアに手をかけたまま振り向く。

いつから起きていたのだろう。

動揺して、何かに触れていないと、よろけて膝をつきそうだ。

部屋と廊下の境目で固まったままの状態は、今の猫の立場を象徴しているようだった。

ご主人様が半分身を起こして、こちらを見ていた。

表情まではわからなかったが、怒っていることは間違いなかった。

「こんな夜中にどこへ行く気だ？」

低く、怒りを無理に抑えた口調で、ご主人様が問う。

食事。

何も、食べてないから。

「ひとりでか。」

選べ！

「なんで黙ってるんだ。」

決めろ！

「男か。」

決めろ！ 今！

「なんとか言え！」

・・・そうだよ。

猫を欲しいひと。

「何を考えてるんだ！ お前は！」

口調と声に怒りが増していく。

最後は、どちらも抑えてはいなかった。

食事をしていないと聞いても、猫のことを心配する言葉もない。

どんどん痩せていくのに、食べているのか心配する様子もない。

わかっている、「悩め」と、

俺を苦しませてるんだから、当然だ、もっと悩め、と思っていたのかもしれない。

ご主人様の怒りが増すほど、不思議なことに猫は冷静になっていった。

もう、何かに触れていなくても、自分の足でちゃんと立っていた。

今更、怒ったって。

今更、猫がいなくなることを怖がったって。

遅いよ。

前に、ご主人様に訊いたよね。

猫を欲しいひとがいるけど、行ってもいい？ って。

そしたら、「行けば」って言ったよね。

だから、行く。

真っ直ぐに、ご主人様の方を向いて答えた。

ご主人様は黙っていた。

猫の方を向いたまま、微動だにしない。

立ち上がって猫を行かせまいとするわけでもなく、最初に起き上がった姿勢のままだった。

猫はご主人様に背を向けると、廊下に足を踏み出した。

ご主人様は、猫がいなくなるなんて考えもしなかったんだ。

どんな仕打ちをしても、猫はご主人様を愛していて、

ずっとずっと、死ぬまで傍にいたいと思ってたんだ。

だから、猫を欲しいひとがいると言ったときも、平気で「行けば」なんて言えたんだ。

猫が、ご主人様を試したと思って。

猫のくせに、俺の従属物のくせに、俺を試すなんて、もってのほかだ。

お前の期待するような台詞は言いたくない、身の程を知れ、と。

でも、そうじゃなかった。

試していたわけではなく、本当に訊ねられていた。

今頃、間違ったことに気付いたって。

遅いよ。

「帰ってくるんだな。」

ご主人様の声で、再び足を止める。

帰ってくるよ。

今度は振り向かなかった。

玄関のドアを開け、外に出ると、後ろ手にドアを閉めた。

帰ってくるよ。

今日は。

ご主人様に、言いたいことも、訊きたいことも沢山ある。

だから、猫は帰ってくる。

でも、次出て行ったら、もう帰らない。

別れの風景5 ご主人様 その4

「俺は、格好の悪い人間になる。

格好悪くても、素直に言える人間になる。」

あのと、ご主人様はそう言った。

確かに言った。

食事をして帰ってくると、ご主人様は起きていて、

やめたはずの煙草を吸っていた。

家に煙草はなかったから、買いに外に出たのだろう。

追いかけてこようとして、やめたのかもしれない。

猫は、わざと何も訊かなかった。

もう、訊く気もなかった。

お帰りの言葉もなく、猫を見上げる。

「これからどうする気だ。」

もう、ご主人様から、離れたい。

「そうか。」

なんでって、訊かないんだね。

「別に、訊かなくてもいい。

勝手に浮気して、そっちがよくなったからだろう。

全面的にお前が悪いんだ。

弁解の余地はないね。

まあ、俺には、金もないしな。

金の切れ目が縁の切れ目。」

どこまで、猫を馬鹿にすれば気が済むんだ……

天を仰いだ。

見えたのは、天ではなく、木目模様の天井だったが。

大きく息を吐くと、視線だけをご主人様の方へ向けた。

猫はずっと立ったままだったので、ご主人様を見下す形になった。

本心で言っているにしろ、

自分を裏切った猫を許せないからそう言ったにしろ、

情けなかった。

ひどく情けなかった。

ご主人様のために、と、一生懸命になったことも、

辛いことも、言いたいことも我慢して頑張ってきたことが、

全て無駄になった。

何一つ報われなかった。

そして、許せなかった。

自分は何一つ悪くないという、その態度が。

やっぱり、何もわかってくれてなかったんだね。

猫のことなんか、どうでもよかったんだ。

お金がなくなったからだったら、もっと早くいなくなってる。

ご主人様、猫がつらいとき、何かしてくれたこと、ある？

話ひとつ聞いてくれなかったよね。

何もしてやらなくても、平気だと思ってたんだよね？

猫だって、自分だけじゃどうしようもないときだって、沢山あるんだよ。

なのに、全然手も貸してくれない。

毎晩、チャットで話してた人達が、ご主人様の代わりにしてくれてたんだよ。

話を聞いてくれて、大変だねって言ってくれて、一緒に怒ってくれて。

だから、なんとかなってたんだよ。

猫が、ご飯が食べられないって言ったら、心配して電話までしてくれたんだよ。

ご主人様は、楽しそうにしているって責めたけど。

今日来てくれたひとだって、猫が痩せて、精神的に不安定になってるからって、

わざわざ来てくれたんだよ。

一緒にだったら食事するだろうからって。

本当はそれって、みんなご主人様がすることじゃないの？

なんで他の人に代わりをさせておいて、自分は何もしないわけ？

それで、『勝手に浮気をしてそっちがよくなったからだろう』って？

自分は何も悪くないって？

ご主人様は、真っ直ぐ猫を見上げていたが、言葉が途切れてすぐに目をそらした。

「だからって、浮気することはないだろう！

それは悪くないのか！

・・・やっぱりそうなんだ。

俺の猫は死んだんだ！

俺が殺したんだ！

お前は違う！

俺の猫じゃない！

勝手に出て行け！」

ご主人様は、布団の上に突っ伏した。

泣いて、わめいて、怒って、怒鳴って。

それなのに、肝心なことは何一つ言葉にしない。

その代わり、

全身で、お前が理解しろ！ と言っている。

本当は、猫が必要なんだ、と。

お前から言え！ と言っている。

ここに残る、と。

何故、猫はそれがわかってしまうのだ？

何故、理解してしまうのだ？

ご主人様の背中を見下ろしたまま、猫は思う。

もう、嫌だ。

それなのに、何故、この人を今すぐ見捨てることができないのか。

こんな思いをしても、何故なのか。

猫の中に、とてつもなく大きな罪悪感があった。

別れの風景6 ご主人様 その5

仕事から帰ってくると、部屋が綺麗になっていた。

心地いい風が、白いカーテンを揺らしていた。

テレビの上に飾ってあったご主人様と猫が笑って写っていた写真がなくなっていた。

空っぽの写真立てを手にとって眺める。

捨てたんだ。

泣きながら、捨てたのだろうか。

それとも、怒りながらだろうか。

写真立てを元の場所に置く。

じっと猫の様子を見ていたご主人様があった。

「それ、もういらないだろう。」

猫のしている結婚指輪をさす。

「よこせ。」

黙って指輪をはずして渡す。

ご主人様は、無造作に側の引き出しを開けて、指輪を投げ込んだ。

指輪の無くなった薬指を見ながら言う。

みんな、猫が悪いって言うんだろうね。

浮気して、勝手に出て行ったって。

今まで無表情だったご主人様が、眉をひそめる。

なんでいつも格好ばかりつけてるの？

「・・・いや、俺が悪いんだ。

俺が猫をそんな風に追い込んだんだ。

かっこつけて、何も言わなくて。

今だって、俺を選んで欲しいと思ってるのに、

今更、そんなこと言えない。

かっこつけて、出て行くなら出て行けて言ったから。」

ご主人様の目から涙が流れる。

「いつもいつもかっこつけて、肝心なことは何も言えなくて。

それで、色々なくしたものがあるのに。

そして、猫も失った。

これから俺は格好の悪い人間になる。

格好悪くても、素直に言える人間になる。」

あのとき、確かに、ご主人様はそう言った。

言ったのに。

それから何ヶ月か経ったとき、ご主人様に会った。

ご主人様は猫が置いていったコーヒーカップにコーヒーを淹れて出してくれたのだが、

コーヒーカップは洗ってないかのように、ひどく汚れていた。

既に猫の好みを忘れてしまったのだろう。

薄く、砂糖もミルクも入っていないブラックコーヒーだった。

「お前の物はもう何もないぞ。

勝手に出て行ったお前が悪いんだ。

浮気して出て行ったんだから、サイテーだよな。

本当は今日だって会いたくなかったんだ。

だけど、金のことはちゃんとしないな。」

目眩がした。

お前が悪い？

自分が悪いと、言ってたのは・・・

ご主人様を見る。

ご主人様は猫を蔑むように見る。

ああ、そうか。

周りの人達に言われたんだね。

「お前は悪くない」

って。

一生懸命に仕事して、家族に仕送りして、

それなのに、猫は協力しようとしなくて、あろうことか浮気して家を出た。

「お前は全然悪くない。悪いのはあいつだ。」

そうみんなに言われたんだ。

言われ続けて、思ったんだね。

「なんだやっぱり俺が悪いわけじゃなかったんだ。

なんで、俺が悪いなんて思ったんだ？

俺のどこが悪かったというんだ？

悪いのはあいつじゃないか

俺は少しも悪くないじゃないか。」

そうなんだね。

可哀想だね。

そうやって、また生きていくんだ。

自分は間違ってたのだから、自分を変える必要はない、と。

また、格好つけて生きていくんだ。

言いたいことも言えず、

格好の悪いことは全て避けて。

「マンション買って、お袋と住むんだ。

この金、その頭金にするんだ。」

思わずご主人様を見る。

ご主人様は、ちょっと舌を出して、猫に笑いかけた。

だから、今更会いたくもない猫を急かして来させたんだ。

早くお金が必要だったから。

うっすら味のついたコーヒーを飲み干す。

カップの底は、前に入っていただろうコーヒーのシミが輪になって残っていた。

これが、ご主人様の猫に対するささやかな嫌がらせなのか。

それでも、猫の中は、罪悪感でいっぱいだった。

お義母さんと一緒に住んでしまったら。

いいの？ それで。新しい人、こないよ。

それを聞いた途端、ご主人様は顔を歪め、声を荒げて言った。

「いいんだよ！

もう、裏切られるのは嫌なんだ！

こんな思いするくらいなら、もう二度と結婚なんてしない！

もう二度と身内以外信じない！」

また

また猫は家族じゃなかったと言ってるよ。

最初から、そうだったのに、なぜわからなかったんだろう。

よかったね。

やっと願いが叶ったね。

ご主人様が、利用されるだけの家族から離れたいと言ったから、

ちょっとずつだけど、猫が一所懸命貯めたお金なんだよ。

勝手に沢山仕送りしてしまったご主人様の取り分なんて、本当はないんだよ。

ーでも、もう、これで終わりにしたいんだー

ご主人様

もう、ご主人様じゃないけれど。

例え、お義母さんと一緒に住んだとしても、お義母さんは義弟を可愛がるのを止めないだろう。

ご主人様に義弟に対する以上の愛情がうつることは、ないだろう。

それを心のどこかで感じたとき、ご主人様は、きっとまた誰かを好きになるだろう。

そのとき、ご主人様はどうするのだろう？

また、その誰かを、お義母さんの代わりにするのだろうか。

さようなら

あのとき、ちゃんと言えなかったから、今度はちゃんと言おうと思っていた。

「うん。」

ご主人様は、玄関で自分の靴の位置を直していて、顔も上げない。

少し待ってみたが、顔を上げる気配がない。

そうか。

顔を上げたくないんだね。

これが最後の別れになるだろう猫をみたくないのか、

今の表情を見られたくないのか、

猫にはわからなかったが、

今、顔を上げたくないのだけはわかった。

さよなら

もう一度言って、ドアを閉めた。

これが、最後。

帰ろう

猫を待つひとの所へ。

猫の居場所をくれるひとの所へ。

その後

そのひとが猫に訊いた。

「猫が俺の所に来たとき、失ったものは何？」

猫はすぐに応えた。

「おとうと。」

「ああ。」

そのひとは、そうか、というように頷いた。

「じゃあ、得たものは？」

「あなた。」

そのひとは微笑んで、再び頷いた。

「それ以外には？」

猫はすぐさま応える。

「幸せ。」

そのひとは、満面の笑顔を浮かべると、

「ありがとう。」

と、言って、猫に手を差し伸べた。

猫は、その手を両手でぎゅっと握りしめて、

「ありがとう。」

と返した。

それは、猫がご主人様の元を離れ、20年経ったときのこと。

あとがき

長い間、探していた居場所を、
猫はやっとみつけることができたようです。

まだ、猫の旅は終わりません。
これからも、試練が待ち構えているでしょう。

だけど、

今はただ、
居心地のいいこの場所で、まどろんでいよう。

全てが許される、この場所で。

奥付

猫

著 炎華

制作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
